

それがあなたに何を意味するか

来るか？ 超国家的・世界的

# 日曜休業令

ジャン・マーカセン  
A. JAN MARCUSSEN

国家の日曜休業令

---

NATIONAL SUNDAY LAW

---

A. Jan Marcussen

訳：野崎 たかし

他国語を含め 3900 万部印刷 2014 年 第 118 版

Amazing Truth  
P. O. Box 68  
Thompsonville, IL. 62890  
Copyright 1983

# 目次

## Contents

第1章 二つの角を持つ獣	1
第2章 獣の本体が判った	11
第3章 獣を詳しく検証する	33
第4章 ダイナマイト	42
第5章 獣の刻印	62
第6章 獣の像	72
第7章 全人類関与の大争闘	84



---

# 第1章 二つの角を持つ獣

---

国家は震え動く。旅客ジェット機が建物に突っ込んで爆発する。火と鉄と煙の山、また高層ビルが崩れて粉塵と化するのを見て、人々は恐怖におびえ、もがき、街路に殺到する。何千という人々が死ぬ。アメリカは戦争に突入する。新種の戦争が起こると、火の玉、泣き叫ぶ女たちの映像などで、我々の心はいっぱいになる。塵をかぶった人々が、ミイラのような様相で粉塵の雲から逃げまどい、自動車は橋を埋め尽くす。

「わが国は戦争に突入した」と大統領が言った。同じ世界は、もう二度とやっこない。テロが、まるで巨大なタコのように、世界を飲み込むのだろうか？それとも、第三次世界大戦がすべてを終わらせるのか？

今、我々は、舞台裏での信じられない旅に出ようとしており、衝撃的な場面を垣間見ようとしている。我が国で何かが起こっている。奇妙な何かが。あなたはその趨勢に気づいているだろうか？

「ニューヨークの品位ある静かなストリートの自分の家の窓から、38人の人びとが近所の殺人事件を見守っていた。それは優に半時間にわたったのだが、彼らはそれについて何の行動もとらなかつた！

その38人はキャサリン・ジェノヴィーズが彼女の家の前で何度もくり返し刺されるのを見て、何も気に留めなかったのである。彼らは窓に身を傾けて、まるでテレビの深夜ショーでも見ているかのように終わりまで眺め、ベッドに戻った。」<sup>1</sup>

攻撃を受けて以来、今やアメリカの情勢は異なっているだろうか？我々は舞台裏へ行って、衝撃的な場面を垣間見ようとしている。そのショック〔衝撃〕に備えられたい。あなたは舞台裏へ行って、わが国を大いなる危機へと導いている、すさまじいものを見るであろう。

それは荒涼とした、ほとんど岩だけで成る島から始まる。深く曇った水平線が広がっていた。草木のない裸の岩棚にひとりの孤独な人物が腰をおろしている。彼の名はヨハネ、黙示録の記者である。彼は幻の中に引きこまれていた。彼は、たいへんなもの—奇妙な獣、相戦う軍隊、国々の勃興—を見ていた！

地上最大の国家が、預言のなかで語られることは驚くにあたらない。ヨハネが見たものは、アメリカ合衆国をかたち造り、あなたに最も決定的な影響を及ぼす警告的な諸事件である！場面の展開を、いま注意深く見守っていただきたい。

「わたしはまたほかの、獣が地から上って来るのを見た。それには小羊のような角が二つあって、龍のように物を言った。」（黙示録 13：11）

預言において「獣」は「王国」を意味する。（ダニエル書 7：

23 参照)。

獣が「海」から上って来るとき、預言でそれは「多くの民族、群衆」（人口の密なる地域）を意味する。（黙示録 17：15）「地」から上って来る、とはまさにその反対である。荒地のなかに芽生えたように一つの国が現れる。他の権力を覆して国を建てるかわりに、この国はそれまで国家形成がなかった地に生まれる。征服によってではなく、出現による国である。ヨーロッパの国々の流血からとは異なって、静かに、平和的に「小羊のように」芽生えてきた国である。

新世界に興って力をつけ、強大化を約束された、この記述に当てはまるどんな国を想像されるだろうか？

その通り！それがアメリカ合衆国であった。

アメリカは植物のように地から現れた。前世紀のある著名な著述者が「空虚から出現した彼女の神秘さ」また「もの言わぬ種子から我々は帝国に成長した」と記録した。<sup>2</sup>

「それには小羊のような角が二つあって」

小羊のような角は、若さ、柔和、そして公民権と宗教の自由を表している。独立宣言と憲法は、それらの高貴な見解を反映している。わが国（訳注：米国をさしている）は、これらの原則そのもののゆえに大を成した。抑圧され、迫害されたすべての国の人びとは、アメリカに希望の期待をかけたのである。<sup>3</sup>

しかし小羊のような角を持つ獣は、「龍のように物を言った。」



と言う。信じられない！

「そして、先の獣の持つすべての権力をその前で働かせた。また、地と、地に住む人々に、致命的な傷がイヤされた先の獣を拜ませた。また、大いなるしるしを行って、人々の前で火を天から地に降らせることさえした。」(黙示録 13：11 - 13)

目を見開いていて頂きたい。このドラマの展開につれて、あなたは最も大変な種類の奇跡を見ることになるのだから。

「…つるぎの傷を受けてもなお生きている先の獣の像を造ることを、地に住む人々に命じた。」(黙示録 13：14)

そのようなことをするアメリカを、想像できるだろうか？！  
そんなことが、どうして起こり得るだろう？  
しっかり見守って頂きたい。

小羊のような角から龍の声とは、性格の変化を意味する。現実の変化である。この国の「龍」のような物言いは、権力の行使を表す。後で述べるように、この原則は黙示録 13 章のひょうに似た獣（第一の獣）によって用いられるもので、それは宗教的慣行を、法律によって強要する。アメリカ政府によるこうした行動は、宗教自由の大原則に真っ向から反することである。憲法は「国会は、宗教の確立を尊重したり、または、その自由な実践を妨げる立法をおこなってはならない」としている。

わが国が「龍のように」語る？ これを聞いて、あなたは心に騒ぎを感じられるに違いない。感情的不寛容な最近の傾向に、思い当たることがないだろうか？ 犯罪に対する怒り、政治的、宗教的、そして社会的腐敗に対してどうだろう？

なぜ国がそのように「語る」のかは、時代の恐るべき傾向に照らして納得できる。アメリカ人はポルノに毎年40億ドルを費やしている。離婚は何千万の家庭をおびやかす、生活を破壊している。

胸を悪くする大量殺人、高齢者層への無関心、幼児にまでおよぶ対女性暴行。物にとりつかれた男たちは、男、女、小さな子どもたちの生命を奪っている。

何百万のアメリカ人がマリファナ、「クラック」、ヘロインその他の麻薬のヒモつきとなり、色んな度合の「よどんだ目」を通して社会を見つめ、その上、その結果としての行動と犯罪で人びとの身の毛をよだたせているのである。

連邦通信委員会（FCC）の最近の報告によれば「5才から14才の間のアメリカの子どもたちはテレビを通して平均一万三千の暴力的殺人を見ている」。<sup>4</sup> また連邦上院小委員会は「テレビに出る暴力は、この十年間にうなぎ登りとなり、実生活における青少年犯罪は約200パーセントに増加した」ことを明らかにしている。<sup>5</sup>

語るのも恐ろしいほど居間と、若者、年寄りの心は、ビデオ映画に占領されている。

売春、同性愛、麻薬の常習者たちは、潔白な人たちをエイズとエイズ関連の複合症で、巻き添えにしている。死者は増加の一途にあり、哀れな被害者たちは失望のうめきを発している。彼らのグループの一つは床の上に円を描いて横たわり、残った最後の力を振り絞り、皆で声をあげて笑い合ったと、ライフ誌は伝えている。<sup>6</sup>

「たしかにアメリカは、最後の崖を真っ逆様に転び落ちている。不徳の下り道につまずいて、もう戻れない処まで加速度を増しつつ落下している」と、ある解説者は語った。<sup>7</sup>

犯罪は十年ごとに倍増している。

経済はどうだろうか？

国は破産した。今まで借金で賄って来たその後、何が次に起こるか、多くの人、知りたがっている。引退した多くの夫婦は食料スタンプか受診カードのどちらかを止められた。それを受け続けるためには、離婚して別々に暮さなければならなかった。

政治と宗教の腐敗は、憲法さえ攻撃の的となった！ 民衆は怒っている。国は怒っている。価値の変動と時代の怒り（預言のスピーディーな成就）に、うっかり一人のジェスイット司祭が口を滑らせて同調し「ここで（訳注—アメリカのこと）誰でもが払うように見える『アメリカ憲法』への敬意というものが私にはどうも判らない。アメリカ人の誰か立ち上がって、おれたちを公平に扱ってくれ、品位を保たせろ、それを…アメリカ憲法でもって、と叫ぶのを聞きたいものだ」と語った。

私たちの国が「龍のように語る」だろうことに何の疑念があるだろうか？ 国じゅうの牧師たちが国家的破滅を止めようとの一念から、何百万を政治的行動に動かすことは驚くには当たらない。何事かをしなければならぬ、というのが感覚なのである。「テレビ教会」の指導者たちが5千万のクリスチャンを目覚めさせる運動に乗り出した！ 共通の利益のためには、力を結集するたいへんな心理的動因がある。

セブン・ハンドレッド・クラブ（訳注：700人の発起人からこの名が生じた）を創設し、自身、政治的指導者の頂点を熱望している説教者、パット・ロバートソンが言った。「クリスチャンたちがこの国および世界を人道的な健全モデルに再構築することを望まないなら、アメリカ政府の支配権を自分たちが、三権委員会および外務評議会から取ることが、絶対に肝要である。」<sup>8</sup>

U. S. ニュース・アンド・ワールド・リポートがこう宣言した。「前例のない政治的聖戦の振幅が、この国でいま最高潮である。」<sup>9</sup>

ただ神に帰って来さえすれば自分たちは事件の悲しむべき状態を改善できるのだ、という思いがわが国に広がっている。もしクリスチャンが一致すれば、これは達成可能なのだ、と指導者たちは言っている。クリスチャン・ヴォイス(キリスト者の声)の指導者、ロバート・グラントは懇願した。「もしクリスチャンが一丸となったら、我々は何でもできる。どんな法律でも、どんな（憲法）修正でも通過させられる。そして、我々のやりたいことはまさしくそれなのだ。」彼は全国ネットのテレビで宣言

する。「私たちは何でも一憲法修正でも一できる。大統領の選出もできるのだ。どんな法律だってつくれるし、改正もできる。そして、それをするのは我々の当然の義務だ。我々がもし、法のもとで生きねばならないのなら、そして、全くその通りなのだが、我々は道徳的かつ敬神的法律のもとで生きるべきだ。」<sup>10</sup>

これは、ただ一人の人間の意見ではない。

レリジャス・ラウンドテーブル（宗教円卓会議）の指導者に宛てられた書簡のなかで、次のような質問があった。「今は、日曜をわが国で礼拝の日とするような立法化を、誰かが促す時なのでしょうか？」

「これに答えて執行部理事長H. エドワード・ロウはこういう返事を書いた。『その通り。それは大統領による立法と布告です』。」

全米規模の新聞と報道機関が「日曜の国家的礼拝遵守の政令確立は政府の責任だ」という申し立てを大衆に伝えれば、その力動エネルギーに誰も疑問を感じないだろう。そして「山をなす経済的災厄からの救いは、国家的日曜礼拝を法によって厳格に励行するまでやって来ないであろう！」

社会の状態を改善するための日曜休業令の州代表アンダーソンが、彼自身の要求による南カロライナ州立法府の公聴会で、騒然たる声援をもたらしたのも驚くには当たらない。アメリカ大統領が、教会と国の分離の壁の崩壊を助ける—という他のどのアメリカ大統領もできなかったことをさせたいという彼の願

望を明らかにしたことを、誰が不思議と驚き怪しめるだろう？

「……龍のように物を言った。そして、先の獣の持つすべての権力をその前で働かせた。」(黙示録 13: 11, 12)。

このようなことは、かつて我々は見えていない。あるショッキングな事実を学ぶ心構えを、以下にして頂きたい。

ここに大きな疑問が起こる。では、第1の獣というのは何なのだろう？

- 1) Vanderman, George Destination Life (Mountain View, Pacific Press Pub. Assoc., 1980) 388 頁
- 2) White, E. G. Cosmic Conflict (Washington, Review and Herald Pub. Assoc., 1982) 388 頁
- 3) 同、389 頁
- 4) Violence and the Mass Media (New York Harper & Row, 1968) 51 頁
- 5) 同、43 頁
- 6) Life (1988 年 1 月号) 48 頁
- 7) Gulley, Norman Is the Majority Moral? (Washington, Review and Herald Pub. Assoc., 1981) 8 頁

8) 同書、同頁

9) 同、10頁

10) 同、20頁

---

## 第2章 獣の本体が判った

---

「わたしはまた、一匹の獣が海から上って来るのを見た。それには角が十本、頭が七つあり、それらの角には十の冠があって、頭には神を汚す名がついていた。」(黙示録 13：1)。

恐るべき特徴をそなえた獣が出てきた。ぜったいに好ましい姿ではない。聖書全体を通して最も恐るべき警告がそれに対して向けられている。(黙示録 14：9, 10 参照)。しかし、その獣の形状について知るまえに、その獣そのものが何かをまず知らねばならないが、それは別に難しくない。事実、聖書がそれを明らかにしており、その特徴を以下に箇条書きにしたので、その答えはあなたが出すことができる。すなわち、

- 1) 預言において「獣」とは王国、国家、権力を表す。預言の書、ダニエル書は、こう告げる。「彼はこう言った、『第四の獣は地上の第四の国である』」(7：23)。
- 2) この獣は「海」から上って来た。獣が「海」から上るとき、それはいつでも、人の多く住む地から起こる権力であることを意味する。「民族、群衆、国民、国語」の中からである。(黙示録 17：15 参照)。すなわち、既存の政権の征服によっ



て現れる権力である。

- 3) この獣は7つの頭と10の角を持つ。頭は生体の中枢であって、国の中枢が首都とよばれることは、ご承知の通りである。

「角」は王、統治者を象徴する。「十の角はこの国から起る十人の王である。」ダニエル書7：24。獣はその頭に在る者の持つ権力であって、その説明は聖書自体がおこなう。

- 4) 獣には「神を汚す名」がついていた。黙示録13：1。神を汚すとはどんなことであろうか？

ここでも聖書がその定義を与えている。ヨハネによる福音書10：32, 33は、ユダヤ人がなぜイエスを石で撃とうとしたかについて記している。なぜ彼らが自分を石で撃とうとするのか、とのイエスの問いに彼らは答えた。「あなたを石で殺そうとするのは、よいわざをしたからではなく、神を汚したからである。また、あなたは人間であるのに、自分を神としたからである。」

神を汚すとは、人が自分を神だとすることである。もちろん、イエスは神であられるので、神を汚してはいない。しかし、神ではない誰かがそれをするなら、それは神を汚すことである。

さらに、次の例がある。すなわちマルコによる福音書2：5－11は、一人の中風の男がイエスの居られる家に、どれほど行きたかったか、しかし、そこは人があまりにも混んでいたことについて述べている。彼はついに友人らを説き伏せて、ペテ

口の家の屋上に運ばせ、屋根を剥がしてイエスが教えて居られる部屋に吊り下ろしてくれるように頼む。願いは叶えられた。イエスは彼の懇願の眼差しに目を止められた。体のいやしに先立って、神のゆるしと平安がこの哀れな男に必要なことを知られたイエスは彼に言われる。「子よ、あなたの罪はゆるされた」彼の心に溢れ満ちたすばらしい平和と喜びを、彼の身になって想像して頂きたい。ところが律法学者たちは、彼の魂についての関心はまるでなかった。彼らは、ただイエスの言葉尻を捕らえようとしていた。それをもって彼を死に定めるために。彼らはこう思った、と聖書は記している。「この人は、なぜあんなことを言うのか。それは神を汚すことだ。神ひとりのほかに、だれが罪をゆるすことができるか。」救い主は彼らの思いを知っておられて、言われた。「なぜ、あなたがたは心の中でそんなことを論じているのか？」それから彼は彼らに問われる。「あなたの罪はゆるされた」というのと、「起きて歩め」というのと、どちらがたやすいか？ イエスは彼らの目の前で、この男をいやされた。人びとの驚きの真ん中に、この男は起き上がり歩いて立ち去った。

この男の罪のゆるしによって、イエスは神を汚しておられない。なぜなら彼は、そのことをされる完全な権能を持っておられた神である。彼のよしとされる誰にでも、この慕わしいゆるしの言葉を語り、天の平和そのものを心にあふれさせることがお出来る御子なる神である。彼は、こう語ることも出来た。「行きなさい。もう罪は犯さないように。」罪責、悲しみと空しさに打ちひしがれた男は、心に平和を得て立ち上がる。自己をむなしくし神に従う、彼の新しい生活が始まる。平和な、幸せな生活を。

彼らは、主のみ顔を平手打ちし、いばらの冠をその聖なる額に押しつけることも出来た。彼らは、主の背中が生肉のようになるまで鞭打つことも出来た。しかし彼らは、罪人のかしらをゆるす彼の王権を奪うことは、出来なかった。驚くばかりの主イエスよ！

しかし、誰であれ、神でない者が罪をゆるすと主張するなら、それは、神を汚すことである。

聖書はこの獣について言う。「頭には神を汚す名がついていた。」(黙示録 13：1)。地上における神であり、人の罪をゆるす権能があると、この権力のかしら主張するというのである。

5) 「龍は自分の力と位と大いなる権威とを、この獣に与えた。」(黙示録 13：2)。 獣は「位」と「権威」を龍から得たことを、聖書は明らかにしている。では、龍とは何者であろうか？

答えは黙示録 20：2 にある。「彼は、悪魔でありサタンである龍、すなわち、かの年を経たへびを捕らえて千年の間つなぎおき」龍はサタンである。しかし、それだけではない。

「また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、大きな赤い龍がいた。それに七つの頭と十の角とがあり、その頭に七つの冠をかぶっていた。その尾は天の星の三分の一を掃き寄せ、それらを地に投げ落とした。龍は子を産もうとしている女の前に立ち、生まれたなら、その子を食い尽くそうとかまえていた。女は男の子を

産んだが、彼は鉄のつえをもってすべての国民を治めるべき者である。この子は、神のみもとに、その御座のところに、引き上げられた。」(黙示録 12:3 - 5)

何年前か前、ある男がシカゴで、自分がその男の子であると主張した。そんなことが、ありうるだろうか？ 滅相もない！

「男の子」はキリストであると黙示録 19:15, 16 は告げている。従って「龍」はサタンであるばかりでなく、王国であり、幼な子イエスが産まれたら、それをもってすぐに殺そうとしたのである。では、ベツレヘムの赤子を殺すように勅命を発した王は、どの王国の王だったろう？

だんだんはっきりして来た。龍はローマを表す。ローマはサタンに用いられて、世の救い主を滅ぼそうとした帝国であった。さらに近寄って調べて見ることにしよう。

龍(ローマ)は「十の角」を持っていた。動物の頭から伸びて出るものが角である。さきに述べたように角は王である。ローマ帝国が崩壊した時、それは10ヶ国に分裂した。蛮族が何年にもわたりローマ帝国を打ち叩き、ついにこれを破って10分割し10人の王によって統治された。アレマニ(ドイツ)、フランク(フランス)、ブルゲンディ(スイス)、スウェヴィ(ポルトガル)、アングロサクソン(英国)、ヴィシゴス(スペイン)、ロンバルト(イタリア)、ヴァンダル、オストロゴスおよびヘルライである。最終の3ヶ国は「クリスチャン」になることを拒んだという理由で、ローマ法王に滅ぼされた。法王に協力したユスティニアヌス帝の軍隊が、オストロゴスをローマの市街か

ら押し出して滅したのである。紀元538年に法王はローマ市を手に入れた。彼が全キリスト教会の頭であるべきであるとする勅令を皇帝が出したからであった。このローマの十分割が、「龍」の10本の角である。(もっと詳しい説明は付録1参照)

6) 「地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、その名を世の初めからしるされていない者はみな、この獣を拜むであろう。」(黙示録13:8)。

それは、政治的権力であるばかりでなく、また宗教的権力でもあって、礼拝を強要し、実現させるというのである。

7) また、それは世界的権力である。「全地の人々は驚きおそれ、その獣に従い」黙示録13:3とある。読者はもうその獣は何か、お気づきのことと思う。

神であり、罪をゆるすことができると自ら主張する人物をその頂上にいただく世界的な政治・宗教的権威に、あなたは何か思い当たらないだろうか？ その「座」と権威を、誰がローマ帝国から受けただろうか？ 全世界から「驚きおそれ従われ」る、かしらなる教会政府とは何か？

ここで非常に重要な、ある事について述べさせて頂きたいと思う。神が「獣」の礼拝に反対して、なぜそのように強く語られるのか。それは、神が人類を愛しておられるからである。神はすべての民を愛される。読者よ、神はあなたを愛しておられる。この権力に従い、その刻印を受ける者はさいわいであり得ないことを、神は知っておられる。「獣とその像とを拜む者、また、

だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない」（黙示録 14：11）ことを、彼は知っておられる。この権力に従って休む暇がないのである。彼は人類をそのように愛されるので、我々の知るもっとも強い言葉をもって警告なさるのである。次の言葉に耳を傾けられたい。

「第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った、『およそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み』（黙示録 14：9, 10)。

強い言葉である。それが愛する者の生死にかかわるものである場合、愛の言葉は常に強い。わたしはお尋ねする。これ以上できることが彼にあるだろうか？ 人類の身代わりとして地獄の死を遂げるべく、彼はみずからの子を、お遣わしになった。誰ひとりとして、獣に従い、その刻印を受ける者の恐るべき運命を経験する必要はないのである。イエスが逃れの道を備えられた。彼はゲッセマネの苦悩、茶番劇の審問と、背中がまるで生肉のようになるまで鞭打たれる拷問に耐えられた。彼らは戯れて伏し拝み、頭を棒で叩き、その額に茨を押しつけ、血をみ顔に流れさせた。カルバリーへの道をよろめく彼を眺めた。うつ伏せに神のみ子は地面に倒れられた。血が点々と十字架の足もとに流れ落ちるあいだ、彼は我々の罪の恐ろしさを耐えられた。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫ぶ彼のふるえる唇を見よ。

竿に懸けられた蛇のように、十字架に架けられて苦悶に身もだえし、罪に対する神の怒りの最後の一滴まで飲み尽くされる

主。「ちょうどモーセが荒野で蛇をあげたように」イエスはあなたのためにあげられたもうた。あなたのために、それをなされた彼が見えるだろうか？ 私とあなたの受けるものを彼はみずから引き受けられた。私たちが獣に従い、その刻印を受けないように、われらの天の神がなぜそのように心配されるのか、あなたはその理由を悟られたでしょうか？ その恐るべき刑罰を、私たちは受ける必要がないのである。イエスが、それを皆お引き受けになられた。彼らが釘を彼の肉なるお体に打ちこんでいるとき、彼は祈られた。「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」そのとき彼はあなたのため、私のために祈っておられたのだ。あなたのために祈られたのである！ 自分自身の救い主として、いま彼を受け入れ、どこまでも彼について行こうではないか！ その選びのもたらすものは、測り知れぬ幸せである。

彼を信頼し、生涯彼に従って、彼の愛のうちに住んで、祈りと、聖書の学びを続けよう。すべてに優先して彼を愛し、幸せな繋がりを保つことが、獣を拜しその「刻印」を受けることから逃れる唯一の安全策である。なぜそうなのかについては、すぐ明らかになる。

その獣の本体を知るにあたり、私たちが理解しなければならぬことは、神は「気づかずに」それに連なっている真面目な民のことを語っておられるのではない、ということである。私の意味することがおわかりだろうか？ 神がその獣を明らかにされる時、神はその「組織」の指導者たちについて語っておられるのであって、彼らは自分たちのしていること、神の言葉を変更して計画的な不服従をしていることを、承知しているので

ある。天の父は弱者にやさしい神であることが、お判りになられたことと思う。神は、聖書の命じるところを理解し、知りながら従わない者、神の言葉を聞くことを拒み退け「故意に無知」であろうとする者だけに、責任を問われるのである。

その獣は現存する。それに連なっている多くのまじめなクリスチャンは、それについての事実を間もなく知るであろう。彼らは、そこから出るようにとの神の声を聞き、それに応じるであろう。「獣」とはヨーロッパのどこかにあるコンピューターだといった解釈に、だまされてはならない。それは、聖書が示す理解に人びとを到らせないようにする煙幕に過ぎない。神の言葉は、それをきわめて明らかにするので、賢ければ子どもでも理解できるものである。次にその獣を特定していこう。

### 8) その獣は、過去に存在した4つの獣(国家)の特質をそなえていた。それを細かく見ることにしよう。

「わたしの見たこの獣はひょうに似ており、その足はくまの足のようで、その口はししの口のようにであった。龍は自分の力と位と大いなる権威とを、この獣に与えた。」(黙示録 13:2)。

それらはどんな国々であろうか？ その答えは、やはり聖書にある。同じ4つの獣がダニエル書7章に出ている。「この四つの大きな獣は、地に起らんとする四人の王である。」(ダニエル書7:17)。それらは4つの世界的帝国であって、ダニエルの時代から降ってローマ帝国の滅亡まで相次いで支配した。すなわちバビロン(紀元前605 - 538)、メド・ペルシャ(紀元前



538 - 331)、ギリシャ（紀元前 331 - 168）、そしてローマ（紀元前 168 - 紀元 476）である。ダニエル書 7 章は、これらについて全面的な説明をしている。

「ダニエルは述べて言った、「わたしは夜の幻のうちに見た。見よ。天の四方からの風が大海をかきたてると、四つの大きな獣が海からあがってきた。……」

「第一のものは、ししのようで、わしの翼をもっていたが、わたしが見ていると、その翼は抜きとられ、また地から起こされて、人のように二本の足で立たせられ、かつ人の心が与えられた。見よ、第二の獣はくまのようであった。これはその体の一方をあげ、その口の歯の間に、三本の肋骨をくわえていたが、これに向かって「起きあがって多くの肉を食らえ」という声があった。その後わたしが見たのは、ひょうのような獣で、その背には鳥の翼が四つあった。またこの獣には四つの頭があり、主権が与えられた。その後わたしが夜の幻のうちに見た第四の獣は、恐ろしい、ものすごい、非常に強いもので、大きな鉄の歯があり、食らい、かつ、かみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。これは、その前に出たすべての獣と違って、十の角を持っていた。わたしが、その角を注意して見ていると、その中に、また一つの小さい角が出てきたが、この小さい角のために、さきの角のうち三つがその根から抜け落ちた。見よ、この小さい角には、人の目のような目があり、また大きな事を語る口があった。……」（ダニエル 7: 2 - 8）。

これは何を意味する絵であろうか。それらがダニエルの時代から始まる国々である。

ライオンーバビロン  
熊ーメド・ペルシャ  
ひょうーギリシャ  
すさまじい獣ーローマ

この獣に伴う特徴は前記の4つに似ていることから、視点をそれらについて掘り下げたい。

2つの翼をもつライオンで象徴されたバビロンは、ダニエルが生きていた時代の世界を支配していた。いま、古代バビロンの遺跡から2つの翼のあるライオンの壊れた像がいくつも発見されている。

ライオンは、古代の王国のなかでもっとも偉大であったバビロンに、ピッタリの象徴であった。2つの翼は“黄金の王国”が当時の文明世界を征服した迅速さを告げる。

どんな点で黙示録13章の「獣」はバビロンに似ているだろうか？

キリストの時代より2千年以上の昔、ノアの曾孫ニムロデひまご（創世記10章参照）によって建てられた古代バビロンは、世界の不思議の中の一つであった。高い、すばらしい、厚さ29メートルの城壁が、完全な正方形を作っていた。590平方キロメートルの市域は美しい対称をもって設計され、そこに豪勢な庭園と競技場が点在していた。97キロメートルの濠、97キロメー

トルの外壁、1枚板の青銅でできた門、空中庭園、ユーフラテス河の下に設けられた地下トンネル。多くの世界的驚異を自身に持ち、美しさと防備が余すところなく調和したこの都市はいまでも絶大な不思議中の不思議である。<sup>1</sup>

バビロンの帝王たちは、神としての礼拝を求めた。感謝されることは人として好ましいことであるが、しかし他の人間に礼拝を求めることは、神を汚すことである。「獣」の指導者は、実にこれを行うのである！

では、次ぎの王国はどうであろうか？

最後のバビロン王ベルシャザルが、なかば酩酊で彼の1千人の君たちのためにパーティーを開き、神の宮から持ち出した聖なる器物で乾杯をしたあの恐ろしい夜、メド・ベルシャが跡を継いだ。死人のような手が彼の運命を宮殿の壁に字を書くのを見、王の膝は恐れで互いに打ち合った。それは彼を踏みつぶす最後の麦ワラであった。恐るべきその夜の記述を見よ。

「ベルシャザル王は、その大臣一千人のために、盛んな酒宴を設け、その一千人の前で酒を飲んだ。…そこで人々はそのエルサレムの神の宮すなわち神殿から取ってきた金銀の器を持ってきたので、王とその大臣たち、これをもって飲んだ。…すると突然人の手の指があらわれて、燭台と相對する王の宮殿の塗り壁に物を書いた。王はその物を書いた手の先を見た。そのために王の顔色は変り、その心は思い悩んで乱れ、その腰のつがいはゆるみ、ひざは震えて互に打ちあった。」

(ダニエル書 5：1, 3, 5, 6)。

厳粛な光景であった！ ベルシャザル王は、血の気のないその手のさまを見、恐れでマヒしてしまった。彼はすべての“ 法術師、カルデア人、占い師 ”たちを呼び入れた。しかし彼らは何の助けにもならなかった。しまいには、ダニエルが後の提案で呼び入れられた。彼が天の神が彼とともにあったゆえに、夢を解釈し王に秘密を解き示し得た事実には、墮落した王は無知でいたわけではなかった。しかしベルシャザルは天の神を憎み、ダニエルを賢者たちのうちに数えることさえしなかった。

しかし、いま現在、彼は死の危機にある。後の提案でダニエルは呼び入れられた。そこで起こったことを見よ。

「そこでダニエルは王の前に召された。王はダニエルに言った、『あなたは、わが父の王が、ユダからひきつれてきた捕囚のひとりなのか』」(ダニエル 5：13)。

かれの魔術師たちが壁の文字を読むことができなかったことを告げてのち、王は尋ねた。

「しかしまた聞くところによると、あなたは解き明かしをなし、かつ難問を解くことができるそうだ。それで、あなたがもし、この文字を読み、その解き明かしをわたしに示すことができたなら、あなたに紫の衣を着せ、金の鎖を首にかけさせて、この国の第三のつかさにしよう。」(ダニエル 5：16)。

ダニエルは、その夜に起こること、地上的な報いは無に帰すことを、よく知っていた。宮廷人のほとんどは数時間のうちに死ぬのであった。

「ダニエルは王の前に答えて言った、『あなたの賜物は、あなたご自身にとっておき、あなたの贈り物は、他人にお与えください。それでも、わたしは王のためにその文字を読み、その解き明かしをお知らせいたしましょう。』」（ダニエル 5：17）。

神に対する彼の背きとプライドについて思い起こさせたのち彼はその文字の意味するところを告げた。ショッキングな知らせであった。

「そのしるされた文字はこうです。メネ、メネ、テケル、ウパルシン。その事の解き明かしはこうです。メネは神があなたの治世を数えて、これをその終わりに至らせたことをいうのです。テケルは、あなたがはかりで量られて、その量の足りないことがあらわれたことをいうのです。ペレスは、あなたの国が分かれたれて、メディアとペルシャの人びとに与えられることをいうのです。」（ダニエル 5：25 - 28）。

王は仰天した。あなたは彼の絶望を想像できるだろうか！結末に長い時間はかからなかった。

「カルデヤ人の王ベルシャザルは、その夜のうちに殺されメディア人ダリヨスが、その国を受けた。この時、

ダリヨスは、おおよそ六十二歳であった。」(ダニエル 5：30, 31)。

王冠、王笏なきベルシャザル—横たわる命なき肉を包む紫の衣。

2つの翼を持った獅子は死んだ。紀元前538年、ダリヨスのもとにメド・ペルシャはスケジュール通りに後を継いだ。ダニエルの夢の熊は、世界を征服した。

黙示録13章の「獣」は、どのようにメド・ペルシャに似ていたのだろうか？

それはメド・ペルシャの統治であった。一旦、法律が制定されたら、それは決して元に戻らないものとして据えられた。政府はぜったいに誤ることのないものと見なされた。読者は「獣」の権力がこの同じ政策をとることを、程なく見ることになるはずである。

メド・ペルシャの統治は、軍事にかけて一人の超自然的な若き天才—アレキサンダー大帝に逢うまでであった。

彼は25歳で偉大なる支配者となった。それは紀元前331年10月1日のことであった。アレキサンダーはアルベラの戦いで軍隊の先頭に立ってペルシャ軍と正面对決し、これを撃破した。彼の軍事的天才により、ギリシャは第3の世界帝国として出現した。

ダニエルの幻の4つの頭と4つの翼を持つひょうが、メド・ペルシャの熊に取って変わった。では、なぜ4つの頭なのか？

アレキサンダーは世界を征服した。しかし、彼は自分を征服しなかった。飲酒の肉欲に負けて、彼はヘラクレスの杯を縁まで満たしたアルコールを飲んだ。たいへんな事であった。人間の胃が受け付ける量は約1リットルまでである。

聞くも怖ろしいが、彼はそれを2杯、飲み干したのである！それは彼の命取りであった。激烈な熱病によってアレキサンダーは33歳で死ぬ。紀元前323年であった。

彼の遺志は「最強の者が」王国を継ぐ一であった、と宣言された。彼の將軍たち、カッサンドル、リシマクス、セレウクスそしてトレミーは王国をとり、それを4分割した。これらの分割が、ひょうの4つの頭に表されている。

4つの翼についてはどうだろう？ それは迅速さを示している。ギリシャは世界をわずか13年で制覇した。こうした芸当は他に類を見ない。(ギリシャの4分割についての詳細についてはフク・ワグナー新百科事典のアレキサンダー3世の項、390, 391ページを参照されたい)

彼の死に先立って、アレキサンダーはギリシャの諸都市に、自分を神として礼拝するよう命じた。ギリシャの生い立ちを受け継ぎ、神として拜むことを求める支配者を持つゆえに、黙示録13章の「獣」はひょうに似ている。

ではダニエル書7章の第4の「恐ろしい、ものすごい」獣は誰であろうか？

「その後、わたしが夜の幻のうちに見た第四の獣は、恐ろしい、ものすごい、非常に強いもので、大きな鉄の歯があり、食らい、かつかみ砕いて、その残りを足で踏みつけた。これは、その前に出たすべての獣と違って、十の角を持っていた。」「…『第四の獣は地上の第四の国である。…』」（ダニエル7：7,23）

このすさまじい獣で代表される第4の王国はローマである。ローマはギリシャを紀元前168年に征服し、最後にはその力をその黙示録13章の「獣」に委譲した。

第4の「恐ろしい、ものすごい獣」から「小さな角」が出てきた。さて、ここに驚くべきことがある。黙示録13章の獣とダニエル書7章の「小さな角」は同じであって、同一の権力なのである！ この権力者は誰であるかについて間違いを起こさないよう、神は明らかにすることを望まれ、それを両方に預言書に示された。

なんと聖書の預言はすばらしいことだろう。「小さな角」についての説明を読んで見よう。

「わたしが、その角を注意して見ていると、その中に、また一つの小さい角が出てきたが、この小さい角のために、さきの角のうち三つがその根から抜け落ちた。見よ、この小さい角には、人の目のような目があ



り、また大きな事を語る口があった。…彼は、いと高き者に敵して言葉を出し、時と律法を変えようと望む。聖徒はひと時と、ふた時と、半時の間、彼の手に渡される。」(ダニエル 7 : 8, 24, 25)。

この「小さい角」の記述を、黙示録 13 章の「獣」の記述と比べると、その両方は同じもの、同じ権力であることが判る。驚嘆すべき相似については付録 1 A を参照されたい。この権力について、もっともびっくりさせられる事は、それが「時と律法とを変えようと望む」ことである。(ダニエル 7 : 25)。ここに自身を神に等しいとし、大胆にも神のおきて、宇宙の憲法を変造しようとする者がいる。神を汚す不敵さをもって、彼はこれを行う。しかし神は言われた、“主の命令はすべて真実、世々限りなく堅固に、まことをもって、まっすぐに行われる。”詩篇 111 : 7, 8 (新共同訳)。

9) この獣は何かという次の手掛りは、「死ぬほどの傷」を受けるまで、神が彼に与えられた支配の時間である。彼の支配は 1 2 6 0 年ということであった。まさに間違いなく、それはその通りであった。神はその期間をダニエル書と黙示録に 7 回くり返し宣べられた！(この驚くべき時限預言についての詳細は付録 2 を参照されたい)

いま、獣が何者かを明らかにする前に、もう 1 つの手掛りがある。

それは黙示録 17 章の赤い獣に乗っている大淫婦も、ダニエル書 7 章の“小さな角”と同じであるばかりではなく、同じ権

力だということである。つぎの記述は、衝撃的である。

「それから、七つの鉢を持つ七人のみ使のひとりがきて、わたしに語って言った、『さあ、きなさい。多くの水にすわっている大淫婦に対するさばきを、見せよう。…』わたしは、そこでひとりの女が赤い獣に乗っているのを見た。その獣は神を汚すかざるかざりの名でおおわれ、また、それに七つの頭と十の角とがあった」(黙示録 17:1-3)。

また例の頭と角である。それらはローマとつながりがあることを知った。その淫婦はローマをコントロールしている。その上に座って乗り回している。関係は緊密である。それはもっと明らかにされる。

この「淫婦」は、腐敗した教会組織を表している。「この女は紫と赤の衣をまとい、金と宝石と真珠とで身を飾り」(黙示録 17:4)。それは豊かな教会なのである。

女は、聖書の預言で教会を表している。神は、彼の民を「美しい、たおやかなシオンの娘」になぞらえておられる。(エレミヤ書 6:2)。乙女は神の清い教会である。みだらな女(大淫婦)は墮落した教会である。

彼女は「淫婦どもと地の憎むべきものらの母」と呼ばれる。(黙示録 17:5)。それは教会であるだけでなく、教会の母なのである。教会の世界的権力者なのである。

「わたしは、この女が聖徒の血とイエスの証人の血に酔いしれているのを見た。この女を見た時、わたしは非常に驚きあやしんだ。」(黙示録 17：6)。

その通り、彼らは聖徒たちを殺すのである！

これは衝撃的だ。あのよう愛であり、情け深い我らの天の父なる神が、なぜ教会をこのように言い、事もあろうに、それを世に暴露なさるとは、いったいどうしたことであろう？ あのように愛と憐れみ豊かな神が、なぜ、この権力に従い、そのしるしを受ける者に、その終わりは火の池だと警告なさるのだろうか？

その答えは、それが真実だからだと、私は信じる。神はきわめて優しい心を持たれるが、彼は常に真実を語られる。

それが衝撃的であることは、私にもわかる。しかし、ここに詐欺をもって全世界をあざむき、男女から永遠の生命を盗むため、サタンが用いた堕落した教会権力がある。この権力は、ニムロデやアレキサンダー大王のように、民の敬意と礼拝を真なる生ける神から、自分たちに向けさせる指導者たちを持つ。これらの指導者たちは、民を神のみ言葉を重んじることから、自分たちの言葉を重んじるように仕向ける。神の戒めを尊ぶことから、自分らの戒めを尊ぶようにさせる。神があのように語られる理由が、ここにある。神は愛だからである。

そこで覚えて頂きたいことは、バビロンと称せられるこの堕落した教会に、多くの誠実な愛すべきクリスチャンがいる。そ

して、彼らは神の招きを聞き、そこから出て来るということである。

「彼は力強い声で叫んで言った、『倒れた、大いなるバビロンは倒れた。そして、それは悪魔の住む所、あらゆる汚れた霊の巣くつ、あらゆる汚れた憎むべき鳥の巣くつとなった』」「わたしはまた、もうひとつの声が天から出るのを聞いた、『わたしの民よ、彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻きこまれないようにせよ』」（黙示録 18：2, 4）。

では一誰が獣なのか？ どんな権力なのか？

- 1) その「位」と権威をローマから受けた。（黙示録 13:4）。
- 2) 世界を1260年（紀元538－1798）支配する。
- 3) 「死ぬほどの傷」を受け、後で治った。（黙示録 13:3）。
- 4) それは政治的権力であると同時に宗教的権力であって、礼拝を受ける。（黙示録 13：4）。
- 5) 神の戒めを改悪する。（ダニエル 7：25）。
- 6) 自分を、罪をゆるすことのできる地上の神であるとす（神を汚す）指導者を持つ。（黙示録 17：5）。
- 7) 教会の母（娘たちは彼女から出た）。（黙示録 17：5）。

- 8) 聖徒らに戦いを挑む。(黙示録 13 : 7)。
- 9) 人びとが驚き怪しむ世界的権力。(黙示録 13 : 3, 4)。
- 10) 666である名を持つ「人間」を頭に持つ。(黙示録 13 : 18)。
- 11) それを受ける者は、火の池に投げこまれ永遠の生命を失う、恐るべき「刻印」を持つ。(黙示録 14 : 9, 10)。

ここまで来ると、おおかたは察しがつくことと思うが、それはローマ法王権である。それは、聖書の挙げる特徴のすべてに適合する、地上の唯一の権力である。

しかし、666についてはどうであろうか？

- 1) Smith, Uriah Daniel and the Revelation (Nashville : Southern Pub. Assoc. , 1944) 42, 43 頁

---

## 第3章 獣を詳しく検証する

---

注意！ 第2章「獣の本体が判った」  
をまだ読んでいなければ、必ずそれを先にお読みください

間違いを起こすことがないように、次の点について注意深く  
考えたい。

「龍は自分の力と位と大いなる權威とを、この獣に  
与えた。」(黙示録 13：2)。

ローマ皇帝の将軍ベリサリアスがオストロゴスをローマから  
駆逐したとき、皇帝ユスティニアヌスは勅令をもってローマを  
法王に「与え」、法王が地上のすべてのキリスト教会の上に立つ  
べきとして、法王制が確立した。紀元538年であった。

ローマは彼に「位」を与えた。それが起こる数百年まえに、  
聖書は、それを預言していた！

法王権は紀元538年から、ある信じ難いことが1798年  
に起こるまで、正確に1260年続いた。つまり、法王が囚人  
とされた！ ナポレオンの将軍ベルチェが法王を捕らえ、フラ  
ンスに連れ去ったのである。

死ぬほどの傷である。法王権は的確に1260年統治した。偶然にこんなことが起こるだろうか？ どうしてベルチェがそれをやったのか？

ナポレオンは世界を制覇したかった。法王権が彼の行く手に立っていた。もし彼らが預言を成就しつつあることを知っていたら、彼らはこうした結果にはさせなかったのではないか？

「…その致命的な傷もなおってしまった。そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い」（黙示録13：3）。

「1929年にイタリア政府はバティカン市を独立の国家として承認した。法王はふたたび王となった。1929年3月、彼は言った、『全世界の民は我々についている』。」サンフランシスコ・クロニクル紙は議定書の解説記事をその1面に載せた。その記事の一部はこうであった。「ムッソリーニとガスパリは歴史的な取り決めにサインした。…長年の傷がなおった。」これは想像もできないことだった。その傷がなおると聖書が預言し、それを新聞がまさしくその言葉で確証した。”<sup>1</sup>

使徒パウロは、道を備えるため働いている権力を予見していた。けれども紀元538年まで、この巨大な組織は公的に確立はされなかった。何がその陰で進んでいたのか、彼にはそれが見えたのだろうか？ この起こりは次ぎのようだ。

イエスが天に戻られてから、聖霊の祝福により初期の教会は急速に発展した。イエスは、彼の民が受ける仕打ちを前もって

告げられた。

「そのとき人々は、あなたがたを苦しみにあわせ、また殺すであろう。またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべての民に憎まれるであろう。」(マタイ 24: 9)。

それは文字どおりに実現した。ここに驚くべき報告がある。

ネロ帝のもとにおける迫害について「彼らの処刑はゲームとされた」と、タキトゥスは書いている。彼らは野獣の毛皮を着せられ、犬に切れ切れに噛み裂かれた。十字架にかけられた。燃えやすいものに巻かれて火をつけられ焼かれて、夜の照明にされた。

「死を逃れるにはキリストを否み、皇帝に犠牲を献げなければならなかった。」<sup>2</sup> ある者はそうしたが、他のもっと多くは主を否むよりは、むしろ拷問の死を選んだ。

「もし福音が勝利を収めたら、異教信仰の神殿や祭壇は一掃されることを、彼女は予見していた。それでキリスト教撲滅のため、彼女は総力を結集した。クリスチャンたちは持ち物を没収され、家を追われた。たいへんな数の人びとが、彼らの証しを血で封じた。貴人も奴隷も、富める者も貧しい者も、学ある者も無学の者も、容赦なく同様に殺された。

「ローマ郊外の丘の下方には、地と岩をつらぬいて長いトンネル歩廊が掘られていた。市の城壁から先に、暗くこみ入った網



の目が何キロにもわたって広がっていた。この地下の避難所に、クリスチャンは死者を葬り、疑われたとき、彼らはそこをすみかとした。多くの者が『更にまさったいのちによみがえるために、拷問の苦しみに甘んじ、放免されることを願わなかった。』（ヘブル書 11：35）。彼らは、真理のために苦しむに足る者とされたことを喜び、はじける火炎のただ中から、勝利の歌を昇らせた。」<sup>3</sup>

サタンは彼らを一掃できなかった。皇帝ネロとディオクレティアヌスは、長年にわたり彼らを千人単位で殺害した。

「あなた方は、我々を殺し、拷問し、断罪できるだろう」とあるクリスチャンは迫害者に言った。「あなた方の不正行為は我々が無実であることの証拠である。」（テルトリアヌスの懺悔、50節）。

紀元313年まで、クリスチャンであることは違法であった。こうした人物は自動的に犯罪者であった。しかし、キリストに付き従う者はいたるところに増えていった。

サタンは、戦術を変えなければならぬことを見てとった。もっとまじな計略でなければならぬ。彼らを殺すよりもっとよい何を悪魔は考えられるだろう？

事をやさしく、しかも浸透させる。賢い将軍のごとく、彼は教会を内部から腐敗させる。何が起こったのかを、検証しよう。

大きな叫びが帝国の各所に挙がった。皇帝コンスタンティヌ

スがクリスチャンになったのである！ クリスチャンたちは幸福感に満たされた。

犬やライオンに噛み裂かれることも、冷血に切り落とされる犠牲とされることも、剣闘士競技場の人間たいまつとして使われることも、もうない。いまやキリスト教は国教である！ 先行きはたいへんなものだ。そう見えた。

しかし、少しずつ何もかも緩まるにつれて、死の拷問についての心配が止まるにつれて、何かが起こってきた。妥協である。

人気と利益のために、指導者たちは標準をだんだんと下げて、異教徒が教会へ入りやすくしたのである。しかし、これによって誤りと異教習慣が持ちこまれることとなった。教会を内側から墮落させるというサタンの計略は驚くには当たらなかった。明らかな警告を神は与えておられた。パウロの、次の衝撃的な言葉がそれである。

「さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの来臨と、わたしたちがみもとに集められることについて、あなたがたにお願いすることがある。霊により、あるいは言葉により、あるいはわたしたちから出たという手紙によって、主の日はすでにきたと触れまわる者があっても、すぐさま心を動かされたり、あわてたりしてはいけない。だれがどんな事をして、それにだまされてはならない。まず背教のことが起こり、不法の者、すなわち、滅びの子が現れるにちがいない。彼は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするも

のに反抗して立ち上がり、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する…不法の秘密の力が、すでに働いているのである。ただそれは、いま阻止している者が取り除かれる時までのことである。」(第2テサロニケ 2: 1 - 4, 7)。

その通り。神はそれが起こることを前もって見ておられた。最後の使徒が死んだのちに、墮落の神秘的な働きが急速に進んでいたのである。何が起こったのか？

迫害が止んでのち、サタンの巧みな段取りは、教会の指導者たちを操ることであった。もし、彼が彼らのエゴをふくらませ、金銭に執着させることが出来れば、組織全体が影響される。出来るだけの異教徒をキリスト教にかちとることが、人気とり競争となる。教会の富と威信が増す。それらを得るために、聖書のある程度変えねばならぬとしても、それが何だ。異教の習慣と儀式をちょっとキリスト教に導入して、彼らをクリスチャンとして扱えば、群れをなして異教徒は入って来るだろう。—これら恐るべきことのすべては、ほんの序の口であった。

使徒たちは、多くの都市に教会をつくって、帝国を隈なく行き巡った。時がたつにつれ、もっと小さい教会が周りの田舎に出来た。エルサレム、ローマ、エジプトのアレキサンドリアが、大センターであった。ローマが究極的に、そのトップとして浮上した。

教会指導者たちの企みの次の段階は、勅令の施行を助けるため、国家の支配権を手に入れることであった。彼らはこの野望

を越えて実現した。紀元538年、ローマの全市は法王、ローマの司教に手渡された時、この大意は出来上がった。それからの1260年、教会の指導者は民事に関して全権威を行使した。すべて預言に予告された通りに。一信じ難いことである。

しかし驚かされることは、これだけではなかった。

獣は「神を汚す名」を持つ、と言われる。(黙示録13:1)。その教会の主要教理のひとつは「目に見える彼らのかしらは、世界のすみずみまで司教、牧師の上に立つ最高の権威を授けられた」とされた。その上に彼は、神のみ名そのものを取ったのである！

彼は「主なる神、法王」と呼ばれ「無謬」であると宣言された。(文書の詳細については付録3を参照)。彼はすべての人の礼拝を要求する。

666についてはどうだろう？ 衝撃的な結果が出た！

法王の公的司教冠は「Vicarius Filii Dei」という称号で、「神のみ子の代理」という意味である。これが彼の公的称号だとする宣言は、長年にわたり公になされてきた。1915年4月18日発行のアワー・サンデー・ビジター紙は言う「法王の司教冠に刻まれている文字は VICARIUS FILII DEI である。それはラテン語で、神のみ子の代理である。」

黙示録13:18は言う、「思慮のある者は、獣の数字を解く(英訳:数える)がよい。その数字とは、人間をさすものである。

そして、その数字は六百六十六である。」

では、それをやって結果を見よう。学校で学んだローマ数字をご記憶だろうか？

**V = 5**

**I = 1**

**C = 100**

**A = 0**

**R = 0**

**I = 1**

**U = 5**

**S = 0**

VとUは同値をとる。百科事典でアルファベットの項を参照されたい。

**F = 0**

**I = 1**

**L = 50**

**I = 1**

**I = 1**

**D = 500**

**E = 0**

**I = 1**

---

**合計 = 666 !**

これはギリシャ語、ヘブル語、ラテン語のどれでも同じ結果が出る。

このショッキングな啓示を人に伝えるとき、あなたは思いやり深く、機転を利かさねばならないと筆者は信じる。神はすべての人を愛されることを、知らせなければならない。真理は告げなければならないが、常に思いやりを要する。

法王権による1260年の支配は「暗黒時代」と呼ばれる。この言葉を前に聞かれたことが、きっとおありと思う。何が暗黒であったかの理由は、何びとも聖書を読むことばかりか、持つことも司祭たちに禁じられたことによる。聖書を読むことは、何百年にわたり司祭だけに許された。民衆を暗黒と迷信に閉じ込めておくために、サタンは彼らから聖書を取り上げなければならなかった。それが民衆にとって、最善とされた。もし聖書を持っていることが判りさえしたら彼は家から引きずり出され、前庭で柱に縛られ、生きながら焼かれるのであった。(参照文書については付録4を参照)。

次いでヨハネが示されたものは、まったく信じられない、彼を仰天させたものであった。

- 1) Stringfellow, Bill, All in the Name of Lord (Clement : Concerned Pub., 1981) 124 頁
- 2) Cited in Liberty 1980年6月号、13 頁
- 3) White, E. G. Cosmic Conflict (Washington : Review & Herald Pub. Assoc., 1982) 38 - 40 頁

---

## 第4章 ダイナマイト

---

注意！ 第2章「獣の本体が判った」  
をまだ読んでいなければ、必ずそれを先  
にお読みください

クリスチャンたちが、他のクリスチャンたちを殺した、とい  
うことを想像できるだろうか？！ 考えるのも忌まわしいこと  
だが、つぎを読んで頂きたい。

「そして彼は、聖徒に戦いをいどんでこれに勝つこ  
とを許され」（黙示録 13：7）。

「わたしは、この女が聖徒の血とイエスの証人の血  
に酔いしれているのを見た。この女を見た時、わたし  
は非常に驚きあやしんだ。」（黙示録 17：6）。

何とした光景であろうか。ヨハネが非常に驚いたのも無理は  
ない。5千万のクリスチャンが「異端」とされて殺されたこと  
を説明することは書物の一山の本でも、まず不可能である。男、  
女、小さな子どもたちは、聖書を持っているという理由で、あ  
るいは自分の良心にしたがって神を礼拝する自由があると信じ  
ることで、そして他の多くの「犯罪」によって、拷問を受け、

殺されたのである。

歴史は、国教会とその指導者に従わなかったという理由で、全村、全町が地図から抹殺されたことを、明らかに伝えている。

「教会の高僧たちは、自分らの主人であるサタンのもとで学び、獲物の生命を絶たないで、可能な限りに苦しめる拷問の手段を発明した。多くの場合、地獄的拷問は人間の耐久力の最大の限界までくり返された。そして犠牲者は力が尽き果て、死を心地よい解放として喜んで迎えるのであった。」<sup>1</sup> こうしたことはローマ教会に反対する者に定まった運命であった。もしアメリカに機会が訪れたら彼女は「異端」に対し、こんにちも同様のことをするであろう。ローマ教会は決して変わらないというのが、彼女の自慢なのである。パリのカトリック学院院長H. M. A. ブドゥリヤーは、迫害について教会と指導者たちの姿勢を明らかにした。

彼は言う。「異端に遭遇する時、彼女は不十分に見える説得、知的討論、道徳的条理で安心しない。教会は力、体罰、そして拷問に訴えるであろう。」<sup>2</sup>

どのようにワルデンセズ、アルビゼンセズ、ボヘミヤ人その他が、その信仰のゆえに大虐殺、または時間をかけて秘密のうちに殺害されたか、その驚くべき記録については付録5を参照されたい。

もっとも著名な例は、ワルデンセズに関するものである。彼らは、法王権支配の初期において、聖書の写しを持っていたわ



ずかの民のうちの一部分であった。

法王と司祭の指導のもとに、自分の魂の罪のゆるしを得るために自分の体を苦しめ、意味のない骨折りをしている大衆を、彼らは見た。多くは罪の感覚にさいなまれ、神の怒りの仕返しの恐れに悩まされて、力を尽き果たすまで苦しみを受け、一筋の希望の光もなしに、墓に下った。

ワルデンセズは飢えたそれらの魂にいのちのパンを分け、神の約束にある平和のメッセージを開いて、救いの唯一の望みなるキリストを指し示すことを切に望んだ。

救い主は墮落した人間の状態に同情が全然ないので司祭、聖人たちの仲立ちを懇願しなければならない、と司祭たちは説明していた。ワルデンセズはそれらの魂を、憐れみふかく手を差しのべて立って、すべての人に罪の重荷を持ったまま来るよう招いている、彼らの愛なる救い主イエスに向け、ゆるしと平和を得るようにと心から望んだ。

ふるえる唇と涙を浮かべた眼で、しばしばひざを屈め、罪びとの唯一の望みを明らかにする尊い約束を開き、彼らはそれを実行した。熱い願いをもって特にくり返されたのは次の聖句であった。「御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである。」(第1ヨハネ1:7)。

ローマの主張について、あざむかれなかった多くの者がいた。罪びとに代わる人間の執り成しがどんなに空しいものであるか、彼らは見ていた。

救い主の愛の確約は、あまりにも偉大で、嵐に揉まれていた哀れな者たちに実感とまらないほどだった。もたらされた安堵は実に大きかった。彼らに光の大洪水がかぶさって、自分たちは天に移されたかのようにだった。よく、こんな言葉が聞かれるのだった。「神は実際に自分の願いを聞かれたのだろうか？神は私にほほえみかけられるのだろうか？彼はゆるしを与えてくださるのだろうか？」。答えはこうであった。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。」(マタイ 11:28)。

信仰は約束を理解し、うれしい反応となった。「永い遍歴はもう不要なのだ。もう苦労に満ちた聖地巡りはしなくてよい。このままでイエスのもとにゆけるのだ。彼は人の祈りを払いのける方ではない。『あなたの罪はゆるされた』、この自分だって、ゆるしを頂けるのだ！」

真理を渴き求める心に直接語りかける、ふしぎな、崇高な力が神のみ言葉にあった。それは神の声であった。それは、それを聞いた者に確信をもたらした。

たいていの場合、真理の使者は再びは来なかった。彼は他の国を通過して帰ったか、名も知れぬ地下牢で弱り果てた命を終えたか、または真理のため証したその場で骨を晒していた。

ワルデンセズの宣教師たちは、サタンの王国に侵入していたのである。

初代の教会の信仰を保つこの民の存在そのものが、ローマの

背信に対する絶えざる抗議であって、もっとも苦い憎しみと迫害がそこに生じた。聖書の引き渡しを拒む彼らは、ローマの我慢できない犯罪者であった。ローマは彼らを地上から消し去ることを決意する。

法王インノセント 8 世は命令した。その「悪意を持つ忌まわしい有害な教派が」もし「公に転向をしないなら、毒蛇のように粉碎されるであろう。」(付録 6 参照)

彼らに道徳的品性の非難を浴びせることはできなかった。法王の意志にしたがって神を礼拝しようとしなかったことが、彼らの大罪なのであった。この犯罪のために、人あるいは悪魔が考案できる、あらゆる辱め、侮辱、そして拷問が彼らに積み上げられたのである。

彼らは獣のように追跡された。しかし、彼らの血は撒かれた種子の養分となり、種子は誤ることなく実を結んだ。“彼らは多くの国に散らばって、…それは、「神の言とイエスのあかしとのゆえに」喜んですべての苦難を忍ぶ人びとによって、世の終わりまで続けられるのである。(黙示録 1 : 9)。<sup>3</sup>

こうした暴挙は我々の生まれるずっと以前に起こったことであることを覚えていただきたい。しかし、「獣のしるし」を受けることについての警告は、まさしく現在の我々に対するものである。程なく、獣の「しるし」とは何かを、あなたは知ることとなる。

すでに学んだとおり、この権力は、「時と律法とを変えよう

と望む。」(ダニエル7:25)。そんなことが、どうして出来るの  
だろう？

異教徒は聖像礼拝になじんでいたので、教会は偶像礼拝を禁  
じる戒めの第2条を剥ぎとった。彼らは教会に聖像を据えた！

但し、彼らは異教神の像のかわりに、無分別にも死んだ聖徒  
たちの像を据えたのである。人びとは教えられた。それらは単  
に学びと献身を増すためのものであると。しかし、結果ははる  
かに違ったものであった。

どのように偶像が教会に持ちこまれるようになったか、につ  
いては付録7の文献を参照されたい。

彼は「時と律法とを変えようと望む」と言われる。次は公式  
法王教令書にある宣言である。

「法王は、時を変え律法を変更し、キリストの教えであれ、  
すべての物ごとの特免を行う権力を有する。」法王教令書 de  
Tranlatic Episcop 正気とはとても考えられない！

筆者は最初にこの文を読んだとき、啞然として口がふさがら  
なかった。法王の公的宣言文が聖書の言葉とまるでそっくりな  
ことに驚嘆した。残りの9条はそのままにせず、第10条をふ  
たつに切り離して10条とした。(付録8参照)

サタンが戒めの第2条を剥ぎとらせた。彼はしかし、これで  
終わっていない。首領サタンは第4条をも変えたのである！

第4条の変更は、ある期間にわたって徐々に企てられた。誰をもそれに気付かせないためである。しかし、その変更はサタンの傑作であった。驚かないで欲しい。

次の宣言文は（ローマ）教会の権威によってつくられ成文化されたものである。

“質問—教会（ローマ・カトリック）が、戒めの聖日を制定する権威を持つことを証明する他の何かがありますか？

“答え—教会がそうした力を持っていないとしたら、現代すべての宗教が彼女に同意していること、すなわち第7日、土曜日の礼拝を、聖書的に根拠のない週の第1日、日曜の礼拝に代えることを教会は制定出来なかったことでしょう。”ステファン・キーナン著、教理問答書 174 頁。

驚くべきことである。

ギボン枢機卿は言う。「カトリック教会は、彼女に与えられた天来の使命のゆえにより、日を土曜から日曜に変えたのである。」<sup>4</sup> 質問が彼らに続けられる。

“質問—どちらが安息日なののでしょうか？”

“答え—安息日は土曜日です。”

“質問—なぜ私たちは土曜日の代わりに日曜日に礼拝をするのでしょうか？”

“答え—私たちは土曜日でなく日曜日に礼拝します。なぜ  
な  
カト  
からで  
版 50 頁。  
らラオデキヤ会議（紀元364年）において  
リック教会が厳かに土曜から日曜に変えた  
す。”改宗者のための教理問 答書、第3

戒めの第4条は、いったい何と言っているのだろうか？

「安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ  
働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなた  
の神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはな  
らない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はし  
ため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人も  
そうである。主は六日のうちに、天と地と海と、その  
中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからで  
ある。それで主は安息日を祝福して聖とされた。」（出  
エジプト記 20：8－11）。

日曜を聖として崇めるように聖書は命じていないことを、教  
会の権威は認めているであろうか？

彼らは認めている。以下を見ていただきたい。

カトリック枢機卿ギボン「われらの父祖たちの信仰」111  
頁で、このように言っている。「あなたは聖書の創世記から黙示  
録まで読んで、日曜日の聖別を正当と認める1行も見つけ出す  
ことは出来ません。聖書は、私たちが決して聖としていない土  
曜日を、宗教的に尊ぶように命じています。」

トレントの会議（紀元1545年）で、教会指導者たちはその「伝統」を、聖書同様の偉大なる権威として制定したのである！

彼らは、聖書を自分らの思いのままに変更する権威を神が彼らに与えられたと信じた。「伝統」は彼らに人間の教えを意味した。

イエスは言われた。「人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拝んでいる。」（マタイ 15：9）。

異教徒がもっと入り易くするために、彼らが教会内に偶像を持ちこんだように、彼らは聖書の安息日を同じ理由で変更したのである。

それは、どのようにして始まったのだろうか？

太陽はバビロンの古代にまでさかのぼって、異教徒の主神であった。彼らは太陽を日曜に拝んでいたので、妥協的な教会の指導者たちは、もし彼らが安息日を土曜から日曜に変えたら、いくつかのことを達成できると見た。それは第1に彼らを、ローマ人の多くから憎まれているユダヤ人から分離する。ユダヤ人はイエス（ルカ 4：16）を含めて始めから（そして今でも）土曜の礼拝をしている。第2に、もしクリスチャンが異教世界がしている同じ日に礼拝するなら、教会に来ることは異邦人にとってずっとたやすくなる。

それはうまくいった。何千と異邦人たちは集まった。サタンの有害な妥協策は功を奏した。変更はゆっくりと企てられたが真実で忠誠なクリスチャンの多くは驚いた。なぜ全能なる神の

戒めを曲げるような大それたことをしたのか、彼らは指導者たちに尋ねてきた！それが起こることは教会指導者たちには判っており、それへの答えはできていた。それは傑作である。聖書を良く知らない人に、それは立派に聞こえる。

その日にイエスは死から復活されたので、いま彼らは日曜日に礼拝している、と人びとは教えられた。

そうするようにと聖書はただ一箇所にも告げてはいない。しかし彼らはそう聞かされたのである。奇怪である。たぶん、あなた自身も聞いておられるかも知れない。

コンスタンティン帝がクリスチャンになったとき、キリスト教は国教となったことを、あなたはご記憶である。何千の太陽崇拝者が教会に群れ集まるにつれ、彼らが影響の主勢力となるのに時間はかからなかった。彼らのトップ役員のはほとんどは太陽礼拝者であった。ローマ政府は次第に弱くなっていったのでコンスタンティンは、顧問たちとローマの教会役員たちと相談した。「我々はどうしたら良いか？どうやって政府を一体化し安定させられるだろう？」

教会指導者たちの助言は時宜を得たものであった。

「日曜休業令を公布しなさい。法令で、すべての者に仕事を止めさせ日曜を尊ばせなさい。」

それなのである！ それは、太陽礼拝の異教徒を満足させ、今までになかったほどに異教徒、クリスチャンはローマ帝国に



一体化するだろう。

紀元321年。コンスタンティン帝は教会指導者の提案に屈して、最初の日曜休業令を公布した。次が実にその記録である。

「太陽の尊ぶべき日には、すべての判事、町民およびあらゆる職業に携わる者を休ませよ。」紀元321年3月7日勅令、民事法令集成、lib. 3, tit. 12, Lex. 3（詳細は付録9参照）

妥協せず、神を汚そうとしないクリスチャンはジレンマに立たされた。このように、あなたは異教の「太陽の日」を拝むことを強要され、従わなければ罰を受けるようにサタンは働いた。皇帝の日曜休業令の後でも多くのクリスチャンは、彼らの主が守られたように第7日の安息日を尊び遵守を続けた。何が起こるか神は知っておられて、罪の子が“時と律法を変える”ことを望むと預言された。全世界のだましに、サタンは手を着けようとしていた。

司祭たちによって聖書は禁じられた。聖書を持たない新しい世代は、時の経過とともに主の安息日についてすっかり忘れることとなる。

そればかりではない。大教会会議が頻繁に開かれた。ほとんど、毎回、神の世界創造の記念として与えられた安息日は押し下げられ、日曜日が高められた。異教の祝日はついに「主の日」として認められるに至り（法王シルヴェスター—紀元314～337—により）教会指導者は聖書的安息日はユダヤ人の遺物と宣告し、戒めの第4条の遵守によってそれを尊ぶ者は「呪わ

れた者」と宣告された。

真ん中にあるその戒めを剥ぎとり、偽りの日曜礼拝をはじめこむために、聖書を取り上げ、その承認を全世界に命じた。これはペテン王の王であった！

サタンは第4条の戒めを他のすべてに勝って憎むことがおわかりであろう。それは、神が「天と地と海と、その中のすべてのもの」（出エジプト記 20：11）の真の創造者であることを告げる唯一のところだからである。あなたは他の9つ（殺してはならない、盗んではならない等々）と、他の神を拝せるであろう。しかし第4条の戒めを守るには、あなたは、ご自身が第7日目に休まれ、彼の民も彼との愛なる関係のうちに同じようにすることを命じられた、宇宙の創造主を拝まなければならないのである。

先に述べたワルデンセズや、いくつかの他のグループは、この暗黒の時代を通じて聖書を隠して持っていた。そして多くは土曜の聖書の安息日を主がなさっておられたように、後世まで守った。しかし彼らは法律破りと扱われた。彼らは捕らえられると、いつでも死に至る拷問にかけられるのであった。ずた切りにされた彼らの死体は、常に獣は、政治権力を行使してきたことを示している。

終わりの日における神の忠実なる者について「ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある。」（黙示録 14：12）と記されている。

この問題について知る現代の指導者たちは、人びとが安息日を変えたのであって、神ではないことを認める。以下のプロテスタントの指導者たちの驚くべき言明を見ていただきたい。

メソジスト—「私たちが第7日でなくて第1日に礼拝する理由は、明確な戒めに基づくものではありません。人は、第7日から第1日への変更を聖書に求めても無駄です。」クロヴィス・チャップル「生きるための十の法則」61頁。

バプテスト—「今日のキリスト教」紙の前編集者ハロルド・リンゼルは“聖書中のどこにも、土曜日でなく日曜日を聖日として守ることを求めてはいません”と同紙1976年11月5日号に述べている。

米国聖公会—「あなたは第7日に休まなければならないと聖書の戒めは言います。礼拝は日曜に行くべきだとは聖書のどこにも書かれていません。」フィリップ・カーリントン、日刊紙トレント・デイリー・スター、1949年10月26日。

「われらの友カトリックの人たちも、変更がどのように行われたかについて知っている。彼らはいく“私たちは土曜のかわりに日曜に礼拝します。それはラオデキヤ会議で厳粛に、カトリック教会が土曜から日曜に変えたからです。”改宗者のためのカトリック教義問答書、第3版50頁。

カトリック・プレスはいく。「日曜礼拝はカトリックの制度であって、その順守の主張はカトリックの原則でだけ弁護できます。…週の終わりの公的礼拝から週の第1日への変更を、聖

書はその全巻をとおして1ヶ所にも認めていません。」<sup>5</sup>

第7日安息日について、神は旧約聖書中に126回、新約聖書中において62回語られた。週の第1日については新約聖書中にただ8回の言及がある。いま日曜が聖日であり第7日の代わりに礼拝すべきであることを示す聖句を聖書中に発見できた者に、あるカトリックの司祭が千ドルの賞金を出した。これに名乗りをあげた者は1人もいない。筆者も同様なことを行ったが、答えを出してきた人は一人もいない。

週の第1日について言及している8つの聖句についての驚くべき記述については付録10を参照していただきたい。

獣(小さな角の権力)は「時と律法とを変えようと望む」。(ダニエル7:25)とある。戒めの第2条は切り捨てられて、偶像が持ち込まれた。第4条は専ら時にのみ関している。では次の衝撃的宣言はどうであろうか。「法王は時を変え、律法を撤廃する権力を持つ。そしてすべての事柄を、キリストの教えをさえ、特免する。」「法王はキリストの戒めを特免する権能を有し、それを屢々行使した。」法王教令書、de Tranlatic Episcop。

われらの神は心やさしく公平な方であることを覚えよう。無知のゆえに日曜を守り、神の第4条の戒めを破っていた者に罪の宣告は下らない。ただ神の戒めは何であるかを知っていて、故意に不服従な者だけが罪を犯しているのである。神の戒めの1つを破ることはわれらの救い主を痛める1つの罪であることを、そして、もし悔い改めなければ、それは彼にある永遠の生命を奪うものであることを、神の敵は知っている。

多くの牧師さえそれに気づかないように、サタンはこの陰謀を実に深く隠した。この事実を民衆から遠ざけておくために、多くの宗教指導者たちは、死にもの狂いの努力をこれに傾けた。多くの牧師たちにとって、彼らの教師がその教師から学んだこと以外を、学校において何も学ばなかったことは事実、衝撃である。そして彼らはその会衆に、彼らの教師から学んだことを教える。それは何世代にわたって永久化された。第7日安息日について神のみ言葉が示すことを、あなたのご両親、あるいは祖父母も理解しなかったであろう理由がここにある。しかし人びとが真面目に自分で聖書を学ぶとき、彼らの目は開かれる。多くの人びとは説教者の言葉をそのまま受け、神の言葉を自分で学ばない。そうではないだろうか？

何千という人びとが全世界で、神の真の安息日についてのこうした驚くべき真理を聖書に学び、それを彼らの贖いのため死なれた救い主への愛なる服従として聖く守り始めていることについて、筆者は主を讃える。

あなたが神の安息日を聖く守り始めると、それは楽しみとなる。楽しい平和と喜びがあなたの心を満たす。あなたは、もう愛すべき主の戒めのどれをも犯してはいない。それに替わって救い主の側をより近く歩んでいることを知るのである。終わりの日において忠信な者は、「神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ち続ける」と黙示録 14：12 は告げている。

悪魔は説教者たちに、十戒は廃されてしまっていると言わせようと努めている。しかし一体いつ、神の第6条、第8条、また第9条、つまり殺し、盗み、虚言の罪を犯しても良いことになっ

たのだろうか？ それは神と人間とのあいだの愛なる関係であるから、10条全部は共に立つか、倒れるかである。1つを破ることは全部を破ることである。(ヤコブ2:10,11)

イエスは言われた。「わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思っはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである。よく言うておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである。」(マタイ5:17,18)。天地はまだ過ぎ去っていない。私たちは神の無代価の恵みによって救われたのであり、私たちの服従によってではないことは事実である。(エペソ2:8)。彼の救いは無料の贈り物であり、率直な信仰によって受け取れるものであることにより私は神を賛美する。もし人がわがままに、頑固に神に反抗するなら、それは本人が本当に従うまで十分に神を愛してはいないことを示し、この無料の贈り物を受けてはいない、ということも事実である。彼はまだ生まれ変わっていない。神の真の民は従順であり、彼らは彼にこれ以上罪を犯すよりは死を選ぶほどに彼を愛する、さいわいな民である。あなたはイエスと共に歩むとき、従順は楽しみとなる！

モーセはワン・セットの律法以上のものを受けたことは、多くの人に知られていない。彼はあの山で、神が永遠に立つと言われた十戒を授けられた。そのうえモーセは、付録11に述べている礼典律も授けられた。これは動物の屠殺、および他の儀式を規定する律法である。それは「罪のゆえに加えられた。」それは十字架における神の御子の犠牲を前もって指し示していた。それは、罪のための真の犠牲がある日来ることを、民の心に新鮮に保つためであった。罪のない小さな羊は「世の罪を取り除

く神の小羊」(ヨハネ 1:29) を象徴した。イエスは実際に来られて我々のために死なれたので、明らかに、この儀式の律法はもはや必要ではなくなった。

そして、神が彼の民に与えられたもう一つのおきてがあった。それはレビ記 1 1 章および申命記 1 4 章にある健康律である。これらのおかげで、神の民は世界で一番健康な民であった！ 彼らは他の国民の恐ろしい病、現在、我々の持つ病にさえ冒されなかった。われわれの胃と体は彼らと同じなのだから、今日彼らの、賢く、また科学的な健康法則に従う者は、喜ばしい実を刈り取る。彼らは恐るべき癌、心臓麻痺、等々にかからなかった。神は、そのように思いやり深いお方である。それで我々は愛なるおかた、イエスを愛するようになってしまうのである。

十字架によって廃止されたのは、モーセの礼典律であった。この戒めには、動物の犠牲、飲み物、食物の供え物、それから毎年7回の儀典的安息日があって、それらは週の曜日とは関係なく巡って来るのであった。

これらのすべては、我らの救い主の十字架上における死を前もって指し示すもので、いまの我々に価値はない。儀式的飲食物の供え物、新月、安息日などは「きたるべきものの影であって、その本体はキリスト」(コロサイ 2:16, 17) であった。それらはみな、十字架の影であった。パウロはそれを「手で書かれた文書」(英訳) と呼び、それは「十字架につけてしまわれた」ことを明らかにした(コロサイ 2:14)。もう動物を殺さなくてもよくなったことを、共に喜ぼうではないか！ 毎年めぐって来る7回の儀式的安息日は、他の儀式と一緒に廃止され、毎週

めぐって来る「主の安息日」から完全に区別された。さいわいな神ご自身とのつながりとして、彼の民が神の毎週の安息日をこの地上で守ることを望まれ、さらに天に行ってから守ると聖書は言っている！（イザヤ 66：22, 23）。礼典律と十戒とのあいだの違いを示す驚くべき証拠文献については付録 1 1 を参照のこと。

サタンは人類歴史における最大の偽物をつかませた。以下がその衝撃的事件である。カトリックの権威筋は宣言する。

「聖書は告げる。《安息日を覚えて、これを聖とせよ》。カトリック教会は否という。わが神授の権力により安息日を廃止し、週の第 1 日を守ることを命じる。そして見よ、全文明世界は崇敬の礼をもって聖カトリック教会の命令に従っている。」ミズーリ州カンザス市 リデンプトラル大学神父エンライト、C . S . S . R . 安息日の歴史 802 頁より引用。

大変な話である。聖書がこういうのも当然である。

「また、龍がその権威を獣に与えたので、人びとは龍を拝み、さらにその獣を拝んで言った、『だれがこの獣に匹敵し得ようか。だれが、これと戦うことができようか』。地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、その名を世の初めからしるされていない者はみな、この獣を拝むであらう。」（黙示録 13：4, 8）。

驚くべきことであるが、暦は軌道を踏み外さなかった。われわれの週日は、キリストの時代からの連続であることがどうし



て判るかについては付録12を見ていただきたい。

下記に示されている聖句を知らない牧師たちは言う。「神の戒めについて心配はいらない。ただ毎日神を拝みなさい。でなければ7日の中から1日を選びなさい。」ある人はこういう牧師から教育されているかも知れない。「聖書に従うことで、くよくよしないように。あれは時代に合わなくなっているのだから、あなたはただ正しい生活をしなさい。そうすれば万事はうまくいく。」どうして第7日でなくて日曜日に集まるのかと聞かれて多くの牧師たちは正直に答えるであろう。「土曜日が第7日安息日で、聖書はそれを変えてはいないということは知っています。しかし、それを人に言ったら私は辞めさせられてしまう。」

つまり、ピラトが考えた末に行ったことは、仕事を失いトラブルを抱えこむのを恐れてのことであった。ご記憶のとおり、民衆が「もしこの人を許したなら、あなたはカイザルの味方ではありません。」(ヨハネ 19:12) と叫んだとき、彼は震え上がった。イエスを許すことで、もし民衆が自分に敵対するなら何事が起こるか判らない。自分の首に関わることだ。記録は語る。「それで、ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバをゆるしてやり、イエスをむち打ったのち、十字架につけるために引きわたした。」(マルコ 15:15)。つらいことだった!

ふたたび記す。全地の人びとは驚きおそれて、その獣に従い一驚くにおよばない。自分の仕事を守り、首を守るために、人は妥協する。

これらの真理を学んで素直に聖書に戻り、どこまでもイエス

に従う多数の人のゆえに私は神を讃える。神は真理をきわめて判りやすいものとされた—子どもでも理解できる。

天のみ父と、彼の愛する御子を心を尽くして愛する者だけが獣を拝せず、彼の“刻印”を受けず、終末の間じゅうを耐えるのである。

しかし、その恐ろしい「獣の刻印」とは何であろうか？ その学びが次の章である。

- 1) White, E. G. , Cosmic Conflict, (Washington : Review & Herald Pub. Assoc. , 1982) 498 頁
- 2) The Catholic Church, the Renaissance, & Protestantism, 182, 183 頁
- 3) White, E. G. , Cosmic Conflict, (Washington : Review & Herald Pub. Assoc. , 1982) 72 頁
- 4) Catholic Mirror 1983 年 9 月 23 日 (ギボン枢機卿の公式機関紙)
- 5) Catholic Press (オーストラリア、シドニー) 1900 年 8 月 25 日

---

## 第5章 獣の刻印

---

注意！ 第2章「獣の本体が判った」  
をまだ読んでいなければ、必ずそれを先  
にお読みください

「獣の刻印」と「神の印」は正反対に位置する。終末のときに、各人はそのどちらかを受ける。

神の印を選んだ者は、イエスと彼のすばらしい王国—私たちのどんな想像力も及ばない光り輝く壮麗な楽園に入る。そこは慈愛、平和、そして幸せが治める国である。獣の刻印を選んだ者は、火の池に投げこまれる。

人よ！ 私たちが望まないものがあるとしたら、それは獣の刻印である。

いま、私たちはあらゆるペテンのなかのペテンを見い出す備えが出来た。それは、世界をあざむき、それを永遠の失望につき落とす。それは最後にラクダの重荷に加えられて、背骨を折る麦ワラのようなものだ。この恐るべき「刻印」について、神が言われることに耳を傾けてみよう。

「ほかの第3の御使が、続いてきて大声で言った、『おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのブドウ酒を飲み、聖なる御使たちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる…』（黙示録14：9, 10）。

獣の刻印とは何かを学ぶには、2つの簡単な方法がある。第1は、その権威のしるしは何かを、獣に尋ねることである。彼はきわめて率直に答えるであろう。第2は、「神の印」とは何かを見つけ出すことである。そうすると、「刻印」は正反対であることがわかる。

なぜ、そのようなたいへんな警告が獣の刻印を受ける者に与えられているか、その理由は、それを受けることが神に対する大いなる罪だからである。それを受ける者が滅びるのは、この理由による。神の印を選ぶ者は一死に直面してさえ一獣に対してではなく、神へ愛と忠誠を示すのである。すなわち、聖書は圧力（それは獣の好むやり方である）が加えられることを明らかにしている。それを拒む者は迫害され、ボイコットされ、売り買いを禁じられ、しまいには死を宣告される！

次の驚くべき言葉に注意されたい。ここで「死の宣告」を強行するのは「獣の像」であることにご注意。

「それから、その獣の像に息を吹き込んで、その獣の像が物を言うことさえできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。…この刻印のな

い者はみな、物を買うことも売ることもできないようにした。この刻印は、その獣の名、または、その名の数字のことである。」(黙示録 13：15, 17)。

いったい何を語っているのだろうか？

あなたの見解がどうであろうとも、一つの危機がひそかに世界に臨んでいるのである。それを人は感知できる。そして、それが来る日は近い。

心を尽くして神を愛する者は、何が来てもこの圧力に妥協しないであろう。彼らは死に面して堅く立ち、生ける神の印を額に受けるであろう。あなたの選びはこれであろうか？これは、どうでもよい問題ではない。永遠の命か、その正反対かの問題なのである。

神の印について、こう記されている。

「また、もうひとりの御使が、生ける神の印を持って、日の出る方から上って来るのを見た。彼は地と海とをそこなう権威を授かっている四人の御使にむかって、大声で叫んで言った、「わたしたちの神の僕らの額に、わたしたちが印をおしてしまうまでは、地と海と木とをそこなってはならない…」(黙示録 7：2, 3)。

預言において「風」は争乱と戦争を意味する。間もなく言及することになるが、世界的騒乱がやってくる。しかし、ここで天使たちは、神の僕たちが彼の印を受ける機会を持てるように、

それを防いでいる。それは現在、ほとんど終わろうとしている。ただ神の大いなる愛と慈しみによって、もうしばらくの間だけ、それは延期されている。いろいろな「煙幕」があった。世界の「超大国」そして他の国々は幾多の「平和」会議を行ってきた。国々は平和を語り合う一方でハイテク戦争を準備している。平和はないのに「平和、平和」と叫んでいる。

「獣の刻印」がまだ強制されないのは、ただの偶然によるのではない。しかし、天使たちは間もなくその手を緩め始めるのである！ テレビ、ラジオまたは法廷において、神の印を持つ人が迫害されるのを見て、人びとは「印」と「刻印」のあいだの違いを知り、自分の立場を決めるのである。この本そのものも、あなたがこうしたすばらしい事実を見い出すために、神が選ばれた方法の一つであるかも知れない。いま、あなたがこれをお読みになっているのも偶然ではないのである。神は、誠実に謙遜に主に従う人が、そこに含まれる重大な問題を学んで、彼の印を受けられるように、待っておられる。それをさせまいと努めているのが、サタンなのである。

そこに隠されている問題を知り、すべての人が最後の決定を選ぶとき、—それは決算日である。それから人類に対する恩恵期間の終結、7つの最終の災害、そして地上最後の途方もなく巨大な戦闘（これらについては程なく学ぶ）がやって来る。そのとき、あなたがどこに立っているのかは、あなたが今おこなう選びに係っているのである！

まず第1番に、神の「印」とは何であろうか？ 印を捺すことは、法的業務に必ず付随する一つの過程である。法律には統

治する政府の印が押される。その印章には3つの要素が備わっている。

- 1) 統治者の名称
- 2) 統治者の身分
- 3) 彼の統治する範囲

政府の印章が法律または通貨に捺され、公式のものとなる。それをバックアップするものは全国民の忠誠である。神の印は彼の律法を公式のものとし、忠誠を尽くす全宇宙がその後ろに立つ。政府の印章および、それに付随する法令への不服従は誰であれ、政府自体への不服従と見なされる。

政府の統治者の印章が国の法律に捺されて公式なものとなると同様に、神の法律にも彼の印章がある。神は次のように言われた。「わたしはあかしを一つにまとめ、教（英語では律法）をわが弟子たちのうちに封じておこう。」（イザヤ8：16）。

私たちのどこに印を捺されるのだろうか？ 額にである。彼の戒めは心にある。新しい契約のもとに、彼はこう約束された。

「わたしがそれらの日の後、彼らに対して立てようとする契約はこれであると、主が言われる、わたしの律法を彼らの心に与え、彼らの思いのうちに書きつけよう。」（ヘブル10：16）。

それを私たちが選ぶとき、聖霊は神の印を我々の額に捺したもう。額に「前頭葉」があって、頭脳のこの部分に、私たちの良心が住む。あなたが神の印を額に受けるとき、律法はあなたの良心にあること、それを信じること、それに忠誠を尽くすことを意味する。

法律をその国に履行するのに、政府の統治者が政府印章を用いると同様に、神はご自分の印章を彼の律法を履行するために用いられる。獣は神の領域において、彼の印章（刻印）を強制しようと企てるというのである。

神の印はどこに、その3つの要素と共に示されているだろうか？ それは彼の律法のまさに中心部である。では、もっと近づいて調べてみよう。

「安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざをもしてはならない。……主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。」（出エジプト 20：8－11）。

神の印を見い出すことが出来るのは、全聖書中にここだけである。ここに印の3要素がある。

1) 彼のみ名「主」



2) 彼の身分「あなたの神」(創造主)

3) 彼の統治範囲「天と地と海と、その中のすべてのもの」

これは大変なことである。サタンがあればほど一所懸命に聖安息日の真理を私たちから隠すため働くのも不思議ではない。それは神の印章なのだ！

「安息日は本当に神の印なのですか？」とあなたは問われるかも知れない。エゼキエル 20：12 を見て頂きたい。

「わたしはまた彼らに安息日を与えて、わたしと彼らとの間のしるしとした。これは主なるわたしが彼らを聖別したことを、彼らに知らせるためである。」(しるしは証印である。ローマ 4：11 参照)

「わが安息日を聖別せよ。これはわたしとあなたがたとの間のしるしとなって、主なるわたしがあなたがたの神であることを、あなたがたに知らせるためである。」(エゼキエル 20：20)

この上なく明白である。神の印は彼の安息日である。サタンは、実にこの点を押さえなければならぬことを知っていた。だから獣はそれを剥ぎとって、そこに代用品を入れるのは当然である。

神の安息日を日曜に変える彼女の行為に関する、以下の驚くべき文章に注目されたい。「もちろん、変更はカトリック教会

の行為であると彼女は主張する。そしてその行為は、彼女の聖職としての力、宗教的な問題における権威のしるしである。」<sup>1</sup>

日曜礼拝は法王権のしるしである。日曜礼拝は「獣のしるし」である。

問題は単純である。神はご自分を真の神と言われる。神は彼の安息日を、すべてのものの創造主としての彼のみ力をするしとして与えられた。それを守ることによって、私たちは彼の権威を認める。しかしカトリックは事実上、こう言う。

「否。週の第1日を守りなさい。見よ、文明世界のすべては聖カトリック教会の命令に屈し、うやうやしく腰をかがめている。」<sup>2</sup>「それは神の律法を無効とする、我らの権力のしるしである。」

しかし、日曜を守り、それ以上何も知らないでいる私たちの愛する人たちについてはどうであろうか？ 彼らは獣の刻印を帯びているのだろうか？

そうではない。良く知っていて、自分は神の第4条の戒めを破っていることを理解している者だけに、言い開きが求められる。聖書は言う。「人がなすべき善を知りながら行わなければ、それは彼にとって罪である。」(ヤコブ 4:17)。あなたと私は知って、今やそれに責任がある。間もなく、すべての人はそれを知る。神は、まさにこの点を世界の終わりの日の大いなるテストとされる。それは、迫害のさなかにあっても本当に神を愛して彼に従う者と、ピラトのように大衆に合流し、ついに獣の刻印に終わる、単にクリスチャンと自称する妥協者を分離する。「刻印」は、それが黙示録 13 章の「2つの角のある獣」によって強制され

るまでは正式に捺されない。

たしかに私たちは、どの戒めであれ、それを破ることによって愛する救い主を痛めることを望まない。それは彼の心臓を破ることである。罪は、彼に最も大きな傷を負わせる。私たちの罪を取り去るために、彼は十字架上で死闘のお苦しみを経験された。血潮が彼のみ体を流れ下った。私たちへの彼の愛はきわめて優しい。獣の刻印をみずから受ける者は、進んで愛なる神のみ心を害する者である。彼の戒めを皆守ることを選ぶことは、彼をお喜ばせることである。

あなたが神の安息日を特別な方法で守り始めるとき、あなたのために彼はそれを週のもっとも幸福な日としてくださる。あなたは、気にかかること、働きをまる 1 日わきに退けて、美しい休息をイエスとともに持つことができる。それは体だけではない。魂の休みであり、楽しみで一ぱいの平和、罪からの自由である。

もし安息日に働く必要が、あなたに起こったら、それについても神は助けを与えることがお出来になる。それが駄目になったのを筆者は見たことがない。彼の安息日を聖く守り、土曜日に働かないことを決心した者は、神の特別な保護を得、奇跡的な計らいが与えられる。あなたが安息日に休みをとれるように神が助けてくださるか、もし仕事を失わなければならない時は、さらに良い仕事を与えてくださるか、どちらかである。私は保証する。それが神なのである。それが、天にいますわれらの情け深い父なのである。

地上の人みなは、まさにこの点でテストを受ける。あなたがそうであったように、この世界で何百万という人がこの驚くべき真理を見出した。そして、今までかつてなかったイエスの寄り添った歩みを喜んでいるのである。

思い起こしていただきたい。それを額に受けるとは、それを信じ、それに忠誠を尽くすことを意味した（それはまた、外から見える或るしるしであって、それによって人びとは誰にするしがあり、誰にないかを見分ける事ができる。これについては間もなく学ぶ）。それを手に受けるとは、刻印が“獣の像”によって強制される時、それに従うことを意味する。それを信じてではない。ただ売り買いができるように、仕事を失わないために、自分のいのちを保つために受けるのである。手は、働きと暮らしの支えを象徴する。

これは衝撃的な考えだ。我々のこの自由な国で、そんなことが起こり得るだろうか？ もし「獣の像」が「獣の刻印」を各人が受けるように強制するとしたら、それをどんな具合にするのだろうか？ とにかく「獣の像」とは何を指すのだろうか？

- 1) Thomas H. F. Chancellor of Cardinal Gibbons (安息日の変更に関する問い合わせへの返事)
- 2) Father Enright CSSR of the Redemptoral College, Kansas City, MO. 安息日の歴史 802 頁

---

## 第6章 獣の像

---

「獣の像」とは何だろう？

それは、何をやるのだろうか？

その力を与えるのは、誰だろうか？

その答えはみな黙示録 13 章にあり、私たちは読み進むにつれて段々と揺さぶられる。下の引用文を頭に思い浮かべて欲しい。

「わたしはまた、ほかの獣が地から上って来るのを見た。（これはアメリカ合衆国であることをすでに学んだ）。それには小羊のような角が二つあって、龍のように物を言った。そして、先の獣の持つすべての権力をその前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷がいやされた先の獣を拝ませた。……その獣の像が物を言うことさえできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。また、小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に、その右の手あるいは額に刻印を押させ、この刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもできないようにした。この刻印は、その獣の名、または、その名の数字のことである。」（黙示録 13：11, 12, 15 - 17）。

読者よ、それを考えるだけで、私は胸が悪くなる。そんなことは不可能だと言っても、神の言葉はそれが起こると言うのである。

初めにお断りするが、私はこの国を愛している。私はヨーロッパから帰ってきたばかりであるが、そのことでホッとしている。しかし、み言葉は言う。

アメリカ合衆国（二つの角のある獣）は、法により先の獣のしるしをすべての人に強いて、先の獣を拝ませる。ギリシャ原語によれば“礼拝を強制する”ことを意味する。

国家的日曜休業令が、わが国に強制させられるであろう。それがやってくることは、すでに第1章で見たし、なぜそれが来るかについても学んだ。

「2つの角のある獣」がアメリカ合衆国であることは、すでに見ている。第1の獣は法王権である。獣の像とは、わが国で多くの同じ偽りの教えを説く獣にそっくりな宗教的権力、プロテストスタント界の主勢力である。

率直に言えば黙示録13章は我々に、次の驚くべき事実を明らかにする。すなわち新教国アメリカは法王権を礼拝させ、国家的日曜休業令を通過させてその「刻印」を皆に受けさせ、それに従わない者は、その結果の悩みを受けるということである。

人が霊的衰退の深みに陥り、その法律を通過させるとき、それはわが国に獣の像を造るだけでなく、古い法王権の迫害の原

則をコピーして、すべての者が「獣の刻印」を受ける段取りを設定するのである。<sup>1</sup>

それは段々と明確になる。わが国の法律でそのマークを強制するのは、かの獣ではない。それをするのは、その“像”である新教国アメリカなのである。

つまるところ、我々は愛するこの国の法律に従って神に不服従を選ぶか、我らの主に従うために国の法令を冒すか、のどちらかに立ち至るということである。これは、まさに試みである。もし、あなたが神に真実で忠実であるなら、主の再臨の前の短期間、仕事なく売り買いも許されず、さらに死の刑罰のもとにある自分を見ることになるであろう。そんなことが起こるはずがないように見える。しかしそれは、もう歩き出しているのである。

主の日同盟（Lord's Day Alliance）のような大きな宗教団体はそれを欲しており、それに関する条項はすでに印刷され用意されている。「政教分離」の原則は健在だろうか？

カトリック・トゥウィン・サークルという全米向けカトリック日刊紙は書いている。「必要に応じて安息日〔日曜日を指す〕を全米における〈休息の日〉として再指定する憲法の修正のための、大統領および国会に対する連邦法の請願を、全アメリカ人は問題なく行うであろう。」<sup>2</sup>

こうした力あるグループは純粋な関心を持っている。彼らは多くのよい仕事をしている。より良いテレビのプログラム、家

族の救い、等々。しかし、アメリカが本当に日曜休業令を通過させたら、異教の太陽崇拝を取り込んだローマ教会の太陽の日ではなく神の日を守ることを選ぶ人びとの、宗教的自由を取り去ってしまうことに彼らは気付いていない。それは“獣の印”の強制なのである。自分のしていることの意味を知ってこの抑圧の法律に同意する人びとは、全く決定的に“獣の刻印”を受けることとなる。なぜ？

すなわち、彼らは人間の伝統に従うために、神の戒めに背くことになるからである。主イエスは言われた。

「人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拝んでいる。」(マルコ7:7)。

誤解しないで頂きたい。私は大統領と祖国を愛している。私は事実をお伝えしているのである。

もし、未来の国家的日曜休業令と国家的迫害のことが、あなたの頭に未来ショックとしてグルグル回っているとしたら(かつての私もそうであった)私の言えるすべてはこれである。神に近づきなさい！ あなたの今までの人生になかったほどに、より近く。神は助けを与えられる。それは確実に、速やかにやって来る。

信じる、信じないは別として、私の生まれ故郷ヴァージニア州では既に法制化されている。つまり、強制的日曜休業令と死刑である。次のショッキングな引用を読んで欲しい。



1610年、アメリカ、ヴァージニアにおける最初の日曜休業令は要求した。「すべての男女は安息日（日曜日）の朝なされる礼拝と説教に、そして午後は礼拝と教義問答におもむくべきである。初回の違反にはその週全体の糧食と生活費を失い、2回目には上記の割当ての喪失と鞭打ち、3回目には死が課せられる。」ヴァージニア植民地における神、政治、および軍法による法と秩序。これは1610年5月24日、勲爵士、サー・トマス・ゲーツ中將により制定された。

日曜休業令という恐怖法令は、ヴァージニアその他の州では未だに生きていることをあなたはご存じだろうか？

それに対しヴァージニア州リッチモンドに住むある弁護士が、「それは宗教法であって、憲法違反である」と申し立てが行われたが依然、それはそのままである。

過去二百年にわたり、たいていの州はこうした「日曜休業の恐怖法令」を持っており、施行は断続的であった。現われては消え、いま多くは休眠して待機中である。

お判りになったでしょうか？ 神は、お語りになったことを知っておられ、警告—愛の警告を私たちに与えられたのである。

身分証明カード、番号といったもので、国家的日曜休業令に従う者に売り買いをゆるすこととなるであろう。彼らは、こうした「一時的」便益を持つであろう。これに従わせるために、非常な圧力が加えられる。

何が民衆をあおり立てて、国家的日曜休業令を制定させるのだろうか？

犯罪が第一の原因となるであろう。死刑宣告が戻って来ていることにお気づきだろうか。しかり、犯罪は歯止めがきかなくなった。人びとは恐れている。犯罪に怒っている。これが死刑の復活をもたらした。ほんの数時間前、私は郵便局に立ち寄り、そこで新聞の大見出しが目についてそれを買った。「殺人犯、死刑執行定まる」とあった。

フロリダ州ワイルドウッドで2才の幼児を殺した若い殺人犯に、死刑執行が決まった。この幼児を誘拐して、いたずらし、生き埋めにしたのである。犯罪はこのように恐るべき局面に達し、死刑は舞い戻って来ている。判事自身の言。「この極重犯人は、特別に凶悪、悪質で残虐」であったことが明らかである一と。シトラス・クロニクル・ニュース。「執行が終わって、この若い男の家族数人は告発者にキスし抱擁した」と、この新聞は報じている。

聖書は、殺人、強姦、魔術、同性愛等の犯罪に対し、多くの箇所ですら死刑を宣告している。(創世記9：5, 6, 申命記22：25－29, レビ記20：13, 出エジプト記22：18) 昨年アメリカで死刑待ちの囚人は四百人足らずであった。現在は1100人を越える！死刑反対であった世論は、最近2対1の割合で賛成となっている。聖書預言によれば、死刑はカムバックする。

とりわけ恐るべきことは、神を愛し、神に従う者に対して、それがカムバックし行われることである。「それから、その獣の

像に息を吹き込んで、その獣の像が物を言うことさえできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。」(黙示録 13：15)。

ほんの何日か前、ニュージャージー州アトランタ市の路上で一群れの人びとが聖書的安息日を守る男と話していた。彼らはトニーという、その男に「いま、もし土曜日のかわりに日曜の礼拝を強要されたら、どうするつもりですか？」と尋ね、さらに「もし、それがあなたの命に関わるとしたら？」と付け加えた。「欲しければ命をとっても良いよ。自分はただ聖書に従うのだから」とトニーは答えた。驚くべきことである。路上のそのグループは、自分たちが何を言っているのかを判っていたのだろうか？

何が進行中であるのか、人びとは知っているのだろうか？強権を用いることは「龍」の方法を用いることである。そうした残虐を復活してこの国に持ちこむことを、神が止められるよう祈るものである。「神の僕らの額に印をおしてしまうまで」彼はそうなさることを知り、感謝する。

日曜休業令が急がれている第2の理由は、経済的危機である。それについて私が説くまでもないほど、人びとはそれに気づいている。

第3の理由は、すべての民衆の宗教指導者たちがこの法律の大いなる必要性を人びとに思いこませ、法制化に国を動かしているからである。第1章ですでに述べたように、メディア情報と文書は全米にバラまかれて、大衆を急がせている。すなわち「政令と行動による日曜礼拝の厳しい施行がない限り、山なす経済

的災害からの救いはない。」<sup>3</sup> これは、今、国を強いて「獣の印」を強制する預言の成就であると、あなたと私は明らかに認め得る。しかし、聖書についてほとんど知らない普通の人にこの促進活動はきわめて耳よりな話しに聞こえる。

これに助けとなってやって来るもう一つの事は、奇跡である。超自然的なものに対する、最近の異常な興味の盛り上がり、あなたはお気づきであろうか？ たしかに、神は奇跡をなされる神である。そして、それ故にすべての奇跡は神からのものだと、多くの人々は信じる。聖書を知らないで、彼らはサタンの奇跡に更に容易にあざむかれる。次に注意されたい。

「また見ると、龍の口から、獣の口から、にせ預言者の口から、かえるのような三つの汚れた霊が出てきた。これらは、しるしを行う悪霊の霊であって、全世界の王たちのところに行き…。」(黙示録 16 : 13, 14)。

ここの要点は、悪魔も神のように奇跡を働くということである。この欺きの手段によって、全世界は獣の礼拝に引きこまれ獣の刻印を受ける。神のおきては抑圧的であり、経済と国家を救うため、日曜礼拝論者とともに行くべき決定的な証拠を奇跡を通して得たと、多くの者は考える。

何百万の人々をだます、こうした欺きの奇跡の主流の一つは、死んで天に行っていると考え愛する者と人びとが、コミュニケーションしたかのように見せることである。神の明らかな言葉を知らない人にとって、これは圧倒的な感わしである。

誰であれ、死せる者と交流を持とうと試みることを聖書は禁じている。彼らはそうして悪霊を招いているのである。聖書の時代、この種のことをする者が死に定められたのは、この理由による。

しかし、現代の社会に住む者も、この同じ落とし穴に落ちこむのである！　すでにサタンはそのための工作を施している。「グリーレイ調査によれば、アメリカ人4人に1人は、死者との連絡を試みた。そして、夫に先立たれたアメリカとアイスランドの未亡人の半数は、死者と話したと言っている。」<sup>4</sup>

国家的日曜休業令を通過させるために、まず憲法を直さなければならぬ。政教分離の大原則（特に第1修正条項）を、最初にひっくり返さねばならぬ。

近ごろ、この第1修正条項の変更を口にする誰かに気づいたことはないだろうか？　多くの州で憲法協議会の開催を要求した。しかし、驚くべきことは、政教分離は憲法の中に存在さえしていないと、多くの指導者が信じていることである。聖書預言によれば、政教分離は否認される。しかし、それを出来る限り阻止するように、神は彼の子たちとしての我々に期待なさる。宗教的迫害と不寛容から自由である国を私たちに備えるために、アメリカ建国の移住者たちは血を流した。我々の宗教の自由が垂れ流しに消滅するのを、手放して見ていて良いのだろうか？

世界を変えようとして、日曜礼拝を共通にする各教会は一大運動に連合する。すでに、宗教の指導者たちは自分の教会メンバーたちを政界に入れている。（国家的日曜休業令は宗教的と

なるので、宗教関係の学校に連邦予算を得るため教会を政治に引きこみ、政教分離をつぶして「善い」宗教法令を造ることは、サタンにとって合理的である！） ショッキングではあるが、大抵の著名な政治家たち、および宗教指導者たちは、政教分離に現在反対である。お気づきだろうか？ 彼らはそれを隠そうとしない。衝撃的である。日曜休業令は、我々が直面するぞっとする諸問題を解決し、全クリスチャン世界を一つにするに打ってつけと彼らには見える！

ある夜更け、首都ワシントンに近い、強力な中波放送局から、沈んだ声の流れが来て、背筋に寒けが下るのを筆者は感じた。神のろいが私たちの上にあり、国が悔い改めて、日曜を聖として神に立ち帰るまで、それは除かれない、と鋼鉄のように冷たく、その声は語った。皆の者が「第一の獣を拝む」ことを強制するのは大部分、宗教指導者たちであろう。第一の獣を拝むために、カトリック教会に加入する必要はない。しなければならぬことは、神の権威のしるしではなくて、獣の権威のしるしに従うことである。それで、あなたは神よりもその権威を崇めることになる。神の御目には、それを礼拝していることになるのだ。暗黒時代の凶悪が再現するであろう。近い将来、社会はそれに向けて操作され「獣の印」を受けることに、人気が高まることとなろう。

「そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い、また、龍がその権威を獣に与えたので、人々は龍を拝み、さらに、その獣を拜んで言った、『だれが、この獣に匹敵し得ようか。だれが、これと戦うことができようか』」（黙示録 13：3, 4）。この法律をあえて拒む者は「社会を拒む者」と見なされるであろう。現在、

人を指す最悪の名は、彼を「異端教派」または「分派」のメンバーと呼ぶことである。獣のしるしに反対する者は、最悪の種類の「異端主義者」と見られるであろう。彼らは官憲につきまといられる。罰金と、あらゆる種類の経済的ボイコットが効き目を表さないなら、彼らは死刑を宣告されるであろう。(黙示録 13：15 - 17 参照)。

あらゆる社会的地位の男、女、子どもたちは、命がけで逃げ、もっとも荒れた地域に隠れ、もし捕まれば監獄に投げこまれて罰を待つこととなる。戦争、騒乱、そして自然の恐るべき災厄は彼らのせいにされるであろう。彼らの救い主のように、また彼らの前の何百万の殉教者のように、彼らは愛する者に拒まれ、嘲笑され、「これらすべての厄介を人びとにもたらした、哀れな愚か者」とみなされる。

神に忠実な者たちは、その信仰のゆえに法廷に引き出されるので、神の真の安息日についての問題は、世界じゅうに広まるであろう。神の第4の戒めの真理は、獣の像が法によって強行しようとする偽りの日と対照的に見られる。争闘、歓楽の追求と、この世の混沌にもかかわらず、すべての者は「神の印」か「獣のしるし」のどちらかを受けるように導かれる。

悪鬼の霊どもは全世界を欺くために出て行く。神のみ言葉をガイドとした者たちは、この全世界的ペテンに屈しない。彼らは軽蔑と死の面前にありながら、イエスの聖日について、真理を見出し、それを服従と愛なる感謝のうちに見守る。

そして、すべての者が決定をしたとき（それは長くかからな

い) 猶予の期間は終了し、イエスは最も厳粛な判決を宣言する。

「不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ。」(黙示録 22 : 11)。

生か死か、すべての案件は決定された。そして、黙示録 16 章にある 7 つの最後のすさまじい災害が悪しき者らの上に注ぎ出され、第 6 の災害のもとにグローバルな争闘が始まる。

このことにつき、あなたはどの見方をとるかに関係なく巨大な危機はこの世界に忍び寄っている。

このグローバルな争闘は、あなたはぜんぜん夢想だにしなかった類のもの、あなたのもっとも奔放な想像も描き出さなかったものだ。それは、どんなことになるのであろう？

- 1) Stringfellow, Bill. All in the Name of the Lord, (Clenont : Con-cerned Publications, 1981) 134, 35 頁
- 2) Catholic Twin Circle, 1985 年 8 月 25 日、記事“Sucking Sunday”
- 3) Liberty Confidential Newsletter, Vol. 5 1982 年
- 4) These Times, 1982 年 4 月、Norman, Gulley, “Life after Death-What about the New Evidence?”



---

## 第7章 全人類関与の大争闘

---

すべての道をよぎる、我々による目に見えぬ線がある。

神の忍耐と、彼の怒りのあいだに隠された境界線。

シェークスピア

「大いなる危機が、神の民を待っている。ひとつの危機が世界を待っている。全時代を通してのもっとも重大な戦いが、我々の面前にある。」<sup>1</sup>

「その時あなたの民を守っている大いなる君ミカエルが立ちあがります。また国が始まってから、その時にいたるまで、かつてなかったほどの悩みの時があるでしょう。しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの書に名を記された者は皆救われます。」  
(ダニエル書 12 : 1)。

獣の刻印を受けることに対する黙示録 14 : 9, 10 の大いなる警告が、その役割を終えるとき、そして、すべての者がその心を決めたとき、恩恵期間は終結する。「主のみ前から慰めの時が来て」神の民は、大いなる聖霊の注ぎを受けた。そして彼らは、やってくる厳しい試みに備えをする。彼らは「生ける神の印」

をもって封印を受けた。悪人たちは彼らを選んだ主人のもとに、最終的に離れて行った。彼らは神の慈愛を拒み、彼のやさしい愛をさげすみ、そして律法を足踏みにした。いま、サタンの狂った怒りから無防備で、彼らは彼の力から隠れる何ものもない。彼は、全世界をダニエル書 12：1 に述べられた最終の一大災害に陥れる。神の怒りが、黙示録 16 章に描写される 7 つの災害というかたちで、この反逆の惑星に注がれる。ちょうど、エジプトの 10 の災害が彼らの拝んでいた神々に向けられていたように、7 つの最終の災害も獣とその像に対して特別の焦点を当てられる。

私たちが、この途方もなく大きな主題を学び、その全体像を見るにつれ、神は本当に公平で、恵み深いことを悟るのである。そして、こうした災害を受ける人びとは本当に反抗的、かつ憎むべき輩で、これを見る全宇宙はひとりとして、こうした審きは不公平だと、神を非難する者はいないことを実感する。始めの 3 つの破滅的災害のあと、ひとりの天使がこのように言う。

「このようにお定めになったあなたは、正しいかたであります。聖徒と預言者との血を流した者たちに、血をお飲ませになりましたが、それは当然のことです。」(黙示録 16：5, 6)。

神に敵する法律が公布され、神の従順な民が迫害され、侮られ、死に定められ、—そして、今—

「それから、大きな声が聖所から出て、七人の御使にむかい、『さあ行って、神の激しい怒りの七つの鉢を、

地に傾けよ』と言うのを聞いた。そして、第一の者が  
出て行って、その鉢を地に傾けた。すると、獣の刻印  
を持つ人々と、その像を拜む人々とのからだに、ひど  
い悪性のでき物ができた。」(黙示録 16 : 1, 2)。

でき物があなたの全身を覆った姿を想像できるだろうか？  
こうした痛み、さいなまれるでき物は、獣の刻印をもち、彼  
の像を拜む者だけを悩ますのである。これが起こったら、どう  
であろう。

夕方のニュースで、この流行病の大発生のショッキングな報  
道がなされている様子を想像して欲しい。仕事を失わぬため、  
また安定した人生のために、獣の刻印を受けた何千という人び  
との安心が、いま去ったことを知るのである。

悔いてゆるしを求め神に祈る代わりに、こうしたすさまじい  
腫れ物のためにただ“神の御名を汚し”“苦痛のあまり舌をかむ”  
だけである。

そのうえ百万年を与えたとしても、彼らに変化は起きないこ  
とを神はご存じである。疫病が降り始めるとき、あなたは各人  
すべての運命が永遠に決まったことを知るであろう。そのとき、  
医学は役に立たない。診察室、薬局は怒り、叫び、悲鳴を上げ  
る人びとで埋まっている有様を思い浮かべられるだろうか？  
どんな薬品が、ズキズキと、刺すような痛みを和らげられると  
いうのだろうか？

誰でもがこの大変な苦痛を受けるわけではない。つい最近ま

で迫害され侮られてきた人びとは、いま安全である。神の天使が彼らを守っている。彼らは主を愛し、死にいたるまで従順であった。イエスは今、彼らのすぐ側におられる。彼らは死の宣告を受けたが、神の民は死なない。イエスが彼らを救うために間に入られるのである。悪人たちが疫病と飢えで滅びつつあるとき、神の民は神のみ手の陰にかくまわれるのである。

全くとつぜん、ニュースが飛びこんでくる一水が血に変わったのである！

「第二の者がその鉢を海に傾けた。すると、海は死人の血のようになって、その中の生き物がみな死んでしまった。」(黙示録 16：3)。

死人の血を見たことのある人はあまりいない。それは腐敗して、ゼリーのように凝固している。神の民を憎んだ者たちは、彼らの血を流そうと試みた。今、彼らを思い浮かべて見よ。彼らの熱っぽいでき物の痛みを和らげようと、水道の栓をひねると“死人の血”がムクムクと出て来るのである。

「わたしはまた祭壇がこう言うのを聞いた。『全能者にして主なる神よ。しかり、あなたのさばきは真実で、かつ正しいさばきであります』」(黙示録 16：7)。

岸に立って見よ！ 人びとは恐れる。彼らはどこから飲むか？彼らは従順な者たちの血を流そうとした。彼らに今、飲む血が与えられた。

想像できなかつた何事かが今起こっている。地球を炎暑から防ぐ大気の層が失せている。

「第四の者が、その鉢を太陽に傾けた。すると、太陽は火で人々を焼くことを許された。人々は、激しい炎熱で焼かれたが、これらの災害を支配する神の御名を汚し、悔い改めて神に栄光を帰すことをしなかつた。」(黙示録 16 : 8, 9)。

悪人らは今、恐るべき苦痛を受けている。焼くような炎熱がむき出しのでき物にコンビになって、責めさいなむのである。

モーセの時代のように、不思議は次々と起こる。あるものは神から、あるものはサタンから。悪魔が霊の賜物のにせものを出すことに、悪人たちは気づかない。多くの奇跡を行い、驚くべき働きをした者が、神の安息日を足で踏みつけ、それを尊んだ者たちを迫害した。彼らは神の恵みの内にある者の安全を知つた。しかし今、彼らの憤りは大きい。不服従についてイエスは言われた。

「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである。その日には、多くの者が、わたしにむかって『主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。そのとき、わたしは彼らに

はっきり、こう言おう、『あなたがたを全く知らない。  
不法を働く者どもよ、行ってしまえ』（マタイ7：21  
－23）。

彼らの本当の品性がいま明らかにされた。彼らは「神の御名を汚し、悔い改め」ていなかったのである。

クーラーも激しい炎熱には勝てない。建物はパン焼きかまどようになる。悪人らにとって休めるところは何処にもない。この災害は、民の罪に完全に似合っている。彼らは人間の伝統にしたがって「太陽の日」を尊び、今、神は彼らに太陽を与えられた。ニュー・イングリッシュ・バイブルは、第4の災害で人びとは“敬虔に“焼かれた、と記している。多くの者はその日、彼らがずっと軽蔑してきた神の恵みの隠れ場を心から慕い求める。

神の民はまだ僻地に避難している。しかし荒野のエリヤに食物を備えられた神は、彼らを助けられる。悪人たちは疫病で死んで行くあいだ、天使は神の忠実な民をかばい、彼らの欠乏を支える。神のみ約束は、

「正しく歩む者、正直に語る者、しえたげて得た利をいやしめる者、手を振って、まいないを取らない者、耳をふさいで血を流す謀略を聞かない者、目を閉じて悪を見ない者、このような人は高い所に住み、堅い岩はそのとりでとなり、そのパンは与えられ、その水は絶えることがない。」（イザヤ33：15, 16）。

「貧しい者と乏しい者とは水を求めても、水がなく、その舌がかわいて焼けているとき、主なるわたしは彼らに答える、イスラエルの神なるわたしは彼らを捨てることがない。」(イザヤ 41：17)。

頑迷なる者たちが苦痛で悲鳴をあげている間、汗で悪臭を放っている間、そして彼らの渴いた喉が渴きでヒリヒリしている時、神の民に対する彼のみ約束は

「主はあなたを守る者、主はあなたの右の手をおおう陰である。昼は太陽があなたを撃つことなく、夜は月があなたを撃つことはない。主はあなたを守って、すべての災いを免れさせ、またあなたの命を守られる。」(詩篇 121：5－7)。

神を尊んで彼の「印」を受けるかわりに、獣を尊ぶことをえらび、その「刻印」を受けた者は暗黒を選んだ。今ふたたび、神は彼らを選んだものを与えられる。

「第5の者が、その鉢を獣の座に傾けた。すると、獣の国は暗くなり、人々は苦痛のあまり舌をかみ、その苦痛とでき物のゆえに、天の神をのろった。そして自分の行いを悔い改めなかった。」(黙示録 16：10, 11)。

想像できるだろうか？ 人の心は、それが全社会を呑みこむ恐ろしさを心に思い浮かべるようには出来ていないと私は考える。上流社会の人びと、富める者、科学者、無知なる大衆は、苦痛、

憎しみ、そしてパニックで麻痺する。この鞭について聖書は語る。“畑は荒れ地は悲しむ。…畑の収穫がうせ去ったからである。……ぶどうの木は枯れ、いちじくの木はしおれ、…野のすべての木はしぼんだ。”“いかに家畜はうめき鳴くか。牛の群れはさまよう。彼らには牧草がないからだ。(ヨエル書 1：10 – 12, 17 – 20)。ああ、もし彼らが神の大いなる憐れみに応えていさえしたら！ 彼のみ腕は愛のうちに差し伸べられていたのだ。今ではもう遅い！

神の印を受けた者は売り買いができないと、不服従の者たちは布告した。いま、彼ら自身が飢饉で飢え、全くの暗やみのなかを手探りしている。この大暗黒の象徴は、真理の光を退けた者の心に、ピッタリな超自然の暗やみである。

神の民は、依然隠れ家にいる。数週間まえ、彼らは職、家を失い、宗教指導者らと悪天使らに駆り立てられた狂気の男たちから、懸命に逃げた。彼らはキリストのために、すべてを投げ出した。神の天使たちが彼らに食物を備えている一方で、悪人たちが滅びるのを、彼らは見た。従順な者たちに、神のみ約束は与えられた。「そのパンは与えられ、その水は絶えることはない。」(イザヤ書 33：16)。「たとい千人はあなたのかたわらに倒れ、万人はあなたの右に倒れても、その災いはあなたに近づくことはない。あなたはただ、その目をもって見、悪しき者の報いを見るだけである。……災いはあなたに臨まず、悩みはあなたの天幕に近づくことはない。」(詩篇 91：7 – 10)。

第5の災害によって、全世界の悪人らは実に怒り狂った。聖書にある神の安息日を尊ぶ者たちは、恐るべき自然界の異変の



原因であると彼らは断定し、彼らを地上から一掃することに決定する。

その日が決められる。時計が定まった日の真夜中を指すと、神の忠実なる民に死が言い渡されるのであった！

すべての人の目に、神の民の運命は決まったと思われる。昼夜、彼らは神に救いを求めて叫ぶ。神は彼らを捨てられたのだろうか？ この経験そのものが彼らを天の至福に備えるのであり、他の何物もその代わりとはならない。

「第六の者が、その鉢を大ユフラテ川に傾けた。すると、その水は、日の出る方から来る王たちに対し道を備えるために、かかれてしまった。また見ると、龍の口から、獣の口から、にせ預言者の口から、かえるのような三つの汚れた霊が出てきた。これらは、しるしを行う悪霊の霊であって、全世界の王たちのところに行き、彼らを召集したが、それは、全能なる神の大いなる日に、戦いをするためであった。」「三つの霊は、ヘブル語でハルマゲドンという所に、王たちを召集した。」（黙示録 16：12 - 14, 16）。

ここが悪鬼どもの霊が神とその民に対し戦うために、彼らの詐術によって世界の支配者たちと民衆を準備し「召集」する場所である。これは全世界的な対決である。これがハルマゲドンの戦いである。それは善と悪との間に戦われる地上最終の戦いである。すべての者はどちらかの側につく。悪人たちは多数派のうちにあり、見たところ、ちょうどダビデに対するゴリアテのように、きわめて優勢にある。

ハルマゲドンという言葉は「ハル」および「メギド」という、2つのヘブル語から成っている。これは、メギドの谷で戦われる単なる局地戦ではない。「ハル」という言葉は山を意味する。「ハルマゲドン」は、悪人らが神と彼の忠信な民に向かうところの一大宇宙戦争をあらわす言葉である。これは、全世界に繰り広げられる戦いである。アメリカの全州的日曜休業令が全世界の国々に拡がる。その全世界的法令は、この憎い教派を1日で、地上から一掃し去る決定的打撃を求める。

(サタンによる不思議と惑わしのさなか) 世界のクリスチャン連合がこれを始める所まで、この非常な背徳行為が行き着くとき、指導者たち(地の王たち)は政令を発して、日曜休業令に沿って行動しない者たちは死に定められる。それによって世界は、彼ら自身が定める運命を完結する場所となる。

神の民、一ある者は未だ牢獄にあり、ある者たちは山々、森林中に隠れていて、神に保護を嘆願し続けている。他方、武装した数々の群れは、悪天使たちに急かされ、大虐殺執行を準備している。彼の忠信な民を救うため、1日24時間の最暗黒のそのときイスラエルの神が介入される。

アッと叫ばせる一撃を与える日時は設定された。それで地表からこの憎むべき教派は、拭い去られるのである。午前零時に、その死の法令は発行する。天の偉大なる神は彼の民を救うために、立ち上がられるのは真夜中である。<sup>2</sup> 何が起こるのか、注目して欲しい。

「第七の者が、その鉢を空中に傾けた。すると、大

きな声が聖所の中から、御座から出て、『事はすでに成った』と言った。すると、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが起り、また激しい地震があった。それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったほどのもので、それほどに激しい地震であった。大いなる都は三つに裂かれ、諸国民の町々は倒れた。神は大いなるバビロンを思い起し、これに神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。島々はみな逃げ去り、山々は見えなくなった。また一タラントの重さほどの大きな雹が、天から人々の上に降ってきた。人々は、この雹の災害のゆえに神をのろった。その災害が、非常に大きかったからである。」(黙示録 16：17 - 21)。

大いなるバビロン、淫婦どもの母が全国家のクリスチャンに太陽礼拝の慣習の混合酒を飲ませたのである。いま、彼女が神の怒りのぶどう酒を飲む番である。

神の民に対し死の宣告を強行するサタンの企ては、最大欺瞞のクライマックスである。神は、彼の民を救うために踏み込まれる。何という救いであろうか！

自然界のすべては大混乱に突入する。山々は風に揺れる葦のように震える。悪人らは、目も当てられぬ怖れでマヒ状態となり、放心の目を見張るだけである。一方、忠信な者たちは、自分たちの救いのしるしを、厳粛な喜びで見守る。あらゆる角度に大岩石が飛び交う。海面は叩かれたような狂気ぶりである。地面は膨れて盛り上がり、裂けて口をあける。山々は次々に引き込まれる。島々が姿を消す。ソドムのような悪の大都会の

各地区は津波に呑み込まれる。1個が“1タラントの重さほど”の大雹が叩きつける。1タラントは約29kgである。この砲丸のような雹が、悪の諸都市を瓦礫の原野にして終う様子を想像して欲しい。

貧者から横領した富で建てられた豪奢マンションは彼らの目前で、粉々に粉碎される。牢獄の壁は転倒し、信仰のゆえに拘束されていた神の素直な民は、自由の身とされる。

神のご要求を踏みにじった者たちの恐怖と失望を描写することは不可能である。神のおきての敵どもは、牧師を頭として、何が真理であるかについて、新しい見方を知る。遅すぎた。彼らはローマ教会が持ちこんだ偽造の安息日の本質、そして自分たちが頼っていた当てにならなかった土台を知る。自分らは負けたと、多くの者はいま悟る。彼らは安易な、大衆受けのする道を選び、そして獣の刻印を受けた。彼らは神の明白なみ言葉を探らないで、宗教指導者に従った。多数派に間違いは起こり得ないと、彼らは信じ込まされてきた。今、自分たちの哀れな状態の故に、彼らは牧師に立ち向かい彼らを激しく責める。<sup>3</sup>

災害のときの最終期におけるグローバルな戦いは、キリストと彼の力ある天軍の来臨に道を開いた。

天にひとつの雲が現れる。それは「王の王にして主の主」の来臨を予示するものである。時とともに、いよいよ地球に接近するそれを、神の民は厳粛な沈黙のうちに見つめる。輝きは一層強まり、なお荘厳になって来て、ついに巨大な白雲となる。その栄光は焼き尽くす火のようである。イエスは偉大な勝利者

として乗り進まれる。

「そして、天の軍勢が、純白で、汚れのない麻布の衣を着て、白い馬に乗り、彼に従った。」(黙示録 19：11, 14)。

天全体は「千の千倍、万の万倍」の、まばゆい天軍で一ぱいのように見えた。それを文章にすることは誰にも出来ない。それはどんな人間の想像力も及ばない聖なる光景である。生ける雲がなおも近づくとつれ、すべての人の目は威風堂々としたイエスのみ姿を目撃する。聖なる彼の額に茨の冠はなく、今は栄光の冠が聖なるみかしらに載っている。彼のみ顔の輝きは、まばゆい太陽もなきに等しい。

「その着物にも、そのももにも、『王の王、主の主』という名がしるされていた。」(黙示録 19：16)。

恐るべき威光の中に、火の炎に包まれた栄光の主が雲に乗って、なおも近づかれると、地は震え動いた。地面は盛り上がって膨れ、山々それ自体が基から動いた。

「われらの神は来て、もだされない。み前には焼きつくす火があり、そのまわりには、はげしい暴風がある。神はその民をさばくために、上なる天および地に呼ばれる。(詩篇 50：3, 4)。

「地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者、奴隷、自由人らはみな、ほら穴や山の岩かげに、身をかくした。そして、

山と岩とに向かって言った『さあ、われわれをおおって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ。御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だれが、その前に立つことができようか』(黙示録6:15 - 17)。

むなしい発言は止まってしまった。のろいや偽りの唇は、もう聞かれない。悪人らは怖れの真っ只中で、神の民が喜びに満たされて口々に叫ぶのを聞く。

「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる。」(イザヤ書25:9)。

地は酔いどれのようによろめき、恐ろしい雷鳴が轟き、自然界の大激変の只中で、神の御子の声が、墓にいる全時代にわたる彼の忠実な者たちに呼びかけられる。

「すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。」(第1テサロニケ4:1, 6, 7)。神の生ける民は「またたく間に、一瞬にして」変えられる。(第1コリント15:51, 52)。地の四隅からよみがえった人びと、そして、生きていて変えられた人々は「引き上げられ、空中で主に会」うのである。(第1テサロニケ4:16)。天使たちは「天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集める。」(マタイ24:31)。小さ

な子どもたちは、聖天使たちによってその母親の腕に渡される。死によって永く別れていた友人らは一緒になり、ふたたび別れる事は、もうない。そして喜びの讃歌は、ひとつとなって神の都に昇るのである。<sup>4</sup> 何という救いであろう！ 何という救い主であろう！

わたしは、心から信じる。これらの神のみ言葉の驚くばかりの真理を読む以外、キリストに何処までも従う深い渴望以外、そして彼の名誉ある王国に分を持つこと以外に、他の道はあなたにない。あなたが真理を学びイエスに何処までも従う真の熱意を持たなかったなら、あなたはこのきわめて特殊な読み物をここまではお読みにならなかっただろうと、わたしは思う。

あなたは、サタンの戦略のいくつか、そして彼は、どのように彼の最大のまやかしを受け入れるように世を欺くかについて学ばれた。またあなたは、獣の刻印を受けることから、どのように逃れるか、そして、この警告をお与えになる神の大いなる愛といつくしみが、どれ程のものであるかを学ばれた。あなたは「バビロン」と呼ばれる黙示録 17 章の不道德な女は、真理と古代バビロンからの太陽礼拝の慣習が混合した、墮落したキリスト教の大母体であることを今見る。あなたは黙示録 8:4 で、神が「わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ。」と呼ばれたことを理解することが出来る。彼は、あなたを召しておられる。それは愛の呼びかけである。それは、自らを組織から分離する、すべての新生をした信者への、神の最終呼び出しである。たとえ、信者たちがどんなに友好的で親切であるにせよ、それはイエスに、すべての彼のいましめに全的に服従してはいない

のである。

本当に間もなく、すべての者は「神の印」か「獣の刻印」か、自分の選びをすることとなる。それは、単に2つの日の問題ではない。それは忠誠と礼拝を神に対して捧げるか、それとも獣の権力に対して捧げるかという問題なのである。われわれのためにイエスが天の至聖所において御自らの血をもって嘆願しておられる今、「神のさばきの時が来た」（黙示録 14：7）今、猶予の時が永遠に閉ざされようとしている今、各人の生か、死かが決定されようとしている今、彼はなお招いておられる。すべてを任せて、いのちと平安を得よ。それは遅すぎたという時がすぐにやって来る。

愛しまつるイエスが彼の尊い血をわたしのためにカルバリーの十字架の上で流されたゆえに、わたしは神の恵みによって彼の第7日安息日を含む、すべての戒めを守って何処までも彼に従い《生ける神の印》を受けらることを選ぶ。あなたはどうか？ あなたもまた、彼に真実であることを選ばれるだろうか？ 彼が間もなく来られるとき、わたしは彼とともに生きたいが、あなたは如何に？ 彼は言われた。「いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門を通して都にはいるために、自分の着物を洗う（英訳：戒めを守る）者たちは、さいわいである。」（黙示録 22：14）。

多くの現代人は真理に対し飢え渴きを募らせている。誠実な人たちはもはや水増しの混ぜ物で満足しない。彼らは純粋な真理を求めている。説教壇からの誤謬を、もう彼らは見抜ける筈だ。あなたは誠実な真理探求者であると、わたしは心より信じる。



でなければ神のみ旨を求めて、これをここまでお読みになる筈がないからだ。

それから、われわれの心に浮かぶ重大な他の質問がある。キリストの千年の統治の問題はどうなのであろう？ 許されぬ罪については？ 罪意識からの自由と、心の平安については？ こんなに多くの教派があるのは、なぜだろう？

これらの質問、また、その他に起こる質問に対し、この小冊子は紙面がゆるさない。そのために私は「各時代の争闘」と題する書物を紹介させて頂く。この興味をそそる本は、こうした、またキリストの再臨に備えるための助けとなる他の重要な質問に答える。「各時代の争闘」で、あなたは「なぜ罪と悩みをゆるされるのか？」「天使とは何か？」について学ぶことができる。サタンの陰謀は、さらに暴露される。黙示録 12:17 にある「残りの子ら」を構成するグループに求められる要求を満たしている組織があるかどうかを、あなたは見つけることができる。またあなたは、天はどんな処かをもっと知って、また、聖霊の大いなる降下について知って感動するであろう。もし、あなたがこの素晴らしい著書を入手したいご希望であれば、下記の発行所に問い合わせられるようお勧めする。

〒 905-0428

沖縄県国頭郡今帰仁村今泊 1471

サンライズ・ミニストリー

TEL0980-56-2783

FAX0980-56-2881

- 1) Olson, R. W. The Crisis Ahead (Angwin, Pacific Union College Book Store, 1981) 5頁
- 2) Whit E. G. Cosmic Conflict (Washington : Review & Herald Pub. Assoc. 1982) 557頁
- 3) 同 558 - 561頁
- 4) 同 561 - 566頁

## 付録 1

紀元476年までにローマ帝国は正確に10の王国に分裂していた。

「歴史家マキャヴェリは、この預言とは一切無関係に、ローマ帝国の最後の王ロマルス・オーガスタス（紀元476年）の失脚の時の西方帝国の領土を占めていた下記の国々のリストを示した。ロンバルド、フランク、バーグンディアン、オストロゴス、ヴィシゴス、ヴァンダル、ヘルライ、スウェヴィ、フン、およびサクソン、合計10。」

「古代ローマの分裂以来、彼らは決して単一の帝国に連合しなかった。アメリカ合衆国のような形にさえ、彼らはまとまらなかった。壊れた断片の再統合を求めた壮大な野望のどれもが失敗した。こうした計画が起こると、それは例外なく粉々に粉碎された。」

「その分裂は以来そのままである。それは、ありありと明白にヨーロッパ地図に刻まれている。懐疑論者に、それは物言わず決定的に、この大いなる預言の成就を証している。」

Grattan Gueness 著、The Divine Program of the World History. 318 - 321 頁（'Bible Readings for the Home' Review and Herald Pub. Assoc., London 1952）216, 217 頁より引用

## 付録 1A

### 「獣」および「小さな角」

- 1) 「小さな角」は「人間の目」をもっていた。  
ダニエル 7：8  
「獣」は人間の数字を持っていた。 黙示録 13：18
- 2) 「小さな角」は、いと高き者の聖徒を悩ます。  
ダニエル 7：25  
「獣」もまた、聖徒に戦いを挑む。 黙示録 13：7
- 3) 「小さな角」は、いと高き者に敵して「言葉を出」す。  
ダニエル 7：25  
「獣」もまた、「口を開いて神を汚し」た。  
黙示録 13：6
- 4) 「小さな角」は10の角（10分割されたローマ）の中  
から出た。 ダニエル 7：8  
「獣」は、(分割ののち) その「力と、位と、大いなる権威」  
とをローマから受けた。 黙示録 13：2

## 付録 2

### 獣による1260年の支配

1260年の期間について7つの聖句は、みな神の民を迫害した同一の権力を指している。これらの聖句は下記の通り。

①黙示録 13：5 ②黙示録 11：2 ③ダニエル書 7：25 ④黙示録 12：14 ⑤黙示録 11：3 ⑥黙示録 12：6 および ⑦ダニエル書 12：7

時に関する預言を解くカギはエゼキエル書 4：6 と民数記 14：34 に与えられている。それらの聖句は、預言の1日は字義通りの1年に相当することを、明らかにしている。この理由により、時に関する預言はすべて最初に日数に数え直さねばならない。この聖書のカギを用いて、時の預言は完全に解けて、理解が簡単になる。

聖書における1ヶ月は30日であり、1年は360日である。これは、時の預言の理解の定則。

黙示録 12：14 で、時は「1年、2年、また半年」と記されている。これは3年半に当たり、1260年に相当する。

黙示録 11：3 と 12：6 には、1260日（獣が神の民を迫害するであろう）と、そのままに表している。

エゼキエル書 4：6 および民数記 14：34 に現れる 1日—1年原則を用いて、私たちはこの権力は“死ぬほどの傷”を受ける前、1260年支配することを見る。この獣の権力について見るとき、これは正確にその通りになったことが判る。期間に関する預言を7回このように反復されたことは、神がそこに重要性を置かれたことを示すものである。

次の聖句はそれらを順序に記したものである。

黙示録 11：2 と同 13：5 はこの権力が 42ヶ月支配することを述べている。（30日×42＝1260日）

ダニエル書 7：25 と同 12：7、黙示録 12：14 は、獣が 3½「時」（あるいは3年半）支配することを述べている。（3½“時”も1260年を意味する。）

黙示録 11：3 と同 12：6 は、この迫害する勢力は1260年統治することを述べている。

7つの聖句すべては、この権力が1260預言的日数すなわち、字義通りの1260年間支配することを示している。

## 付録 3

下記は、彼らの指導者の称号と地位に関するカトリック高僧たちによる権威的労作からの要約である。

「教会に対する彼の優越性を暗示する、キリストに帰すべき聖書中の名称のすべては、同様に法王に帰せられる。」Bellamin, 「公会議（訳注：全カトリック司教総会議）の権威について」第2巻17章

「あなたは牧羊者であるが故に、あなたはいやし手であるが故に、あなたは監督であるが故に、あなたは栽培者であるが故に、すなわち、あなたは地上の別の神である。」Labbe and Cossart 「公会議の歴史」第14巻109節

「主なる神、法王」なる称号については、法王ヨハネ22世の Extravagantes についての注釈、Declaramus 第14部4章を参照

「わが主なる神、法王」(Dominum Deum Nostrum Papam) なる語は、Extravagantes のアントワープ版において153節に、パリ版では140節に現れる。

「故に法王は3層の王冠をもって即位する。天と、地と、煉獄界の王として」Feraris, Prompta Bibliotheca 第6巻26頁、

「法王」の項。

ローマ・カトリック教会法に含まれる条文において、法王インノセント3世は宣言した。ローマ法王は「単なる人間に非ず、神ご自身の地上における代理権限者」である。そして条文の注釈において、こう説明されている。すなわち彼は「まことに神であり、人である」キリストの代理者であるからである。Decreta-les Domini Gregorii Papae (グレゴリー9世の法王教令集) Liberi, de translatione Episcoporum (司教の移動について)、第7部、3章; Corpus Juris Canonice (1881年、ライプツィヒ第2版) 99節; (1612年、パリ版)、法王教令集第2巻205節

## 無謬性について

「ヒルデブランドの指令」(法王グレゴリー7世の名における)として知られる27の陳述は下記の通りである。

- “ 2. ローマ法王のみが正当に万能であると称せられる。
- “ 6. …法王によって破門された者と同じ屋根の下に住むことは、誰であれ不可能である。
- “ 9. すべての君主は、彼の足にだけキスすることが出来る。



“19. 彼は誰にも審かれない。

“22. ローマ教会は決して過去に誤らず、未来に誤らず、聖書に一致して誤らない。

“27. 彼は、不義なる支配者に対する臣下の忠誠を免除することが出来る。”

ダニエル書 7：25 についてのクラークの注解書は、次のように述べている。

「神にのみ属する無謬性を、彼らは当然に持つとした。彼らは、神にのみ属する罪のゆるしを、行うと公言する。」

## 付録 4

トゥルーズの公会議において、教会の指導者たちは次のように規定した。

「我々は新・旧約聖書の写本を一般信徒が所有することを禁じる。…我々は日常の自国語による上記の書物の所有を、もっとも厳重に禁止する。」「地方の領主は住家、納屋、森林、穴蔵からさえ、完全に拭い去るごとく異端者を入念に捜し出すべきである。」  
Council Tolosanum 1229年法王グレゴリー9世

テラゴナの公会議で次のように規定された。

「何びともロマンス語（イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語などの総称）の聖書を所有してはならない。もし、それを所有する者があれば、それを焼却するために、この勅令の公布から8日以内に地方司教に提出せねばならない。」D. Lortsch, Histoire la Bible en France 14頁、1910年

聖書協会が各地に結成された後、驚愕させられる勅令に従って彼らは、それを共産主義の分類に入れた。1866年12月8日、法王パイアス9世は、彼の回章 Quanta Cura において、次のような声明を発する。

「社会主義、共産主義、秘密結社、聖書協会……この種類の有害物は、あらゆる手段をもって撲滅せねばならない。」

## 付録 5

「これらの血なまぐさい金言のもと、歴史のページに際立っているそれらの迫害は、11世紀と12世紀から、ほとんど現在（1845年）まで行われた。オルレアン教会法の、公の殉教の合図が与えられてから十字軍の形のもとに、アルビジェンシズの根絶、宗教裁判所の創設、ワルデンセズを消滅させるための残酷な襲撃、ロロードの殉教、残酷なボヘミア人の殲滅作戦、フスとジェロームおよび他の多数の火刑、…スペインおよびイタリーにおける改革に対する火と剣による殲滅、ポーランドにおける詐欺と公開迫害、バーソロミューの虐殺が、…宗教裁判所の聖法廷での緩慢な秘密処刑の他に続いた。」T.R. Birks M. A. ダニエルの最初の2つの幻 (London: 1845) 258, 259 頁

「スペインにおける宗教裁判所の犠牲者の数は、もと宗教裁判所書記 Llorente 著 [スペインの宗教裁判所の歴史] の 206 – 208 頁に記されている。この権威者は、スペインだけで30万以上が迫害で殉教したことを認めた。そのうち31912人は炎の中で落命した。他に何百万が全ヨーロッパで、信仰のゆえに殺害された。」Bible Reading for the Home (Washington: Review & Herald Pub. Assoc., 1942) 221 頁

「教会は迫害した。それを否定するのは教会史の初心者だけである。…コンスタンティンの後150年、ドナティストたちは迫害され、時には死に処せられた。…教会当局の全的承認のもとに、プロテスタントたちはフランスとスペインで迫害を受け…物的圧力を用いることが良いと考えるとき教会はそれを用いる。」The Western Watchmen (Roman Catholic) St. Louis

## 付録 6

## ワルデンセズに対する布告

「法王インノセント3世による公式大勅書の文章の相当部分が、ワルデンセズに向けられている。(その原本はケンブリッジ大学図書館に収蔵) そのえいごほんやくは、John Douling による、ローマ主義の歴史(1871年版)第6巻5章62節にある。」  
Cosmic Conflict (ワシントン: レビュー・アンド・ヘラルド出版協会、1982年) 602頁参照

## 付録 7

### 像の礼拝について

787年のニケア会議の第2公会議は、教会における像の礼拝を確立するために召集された。この公会議は Baronius による Ecclesiastical Annals の第9巻 391 - 407 頁（アントワープ、1612）および Charles J. Hefele 著原本資料による教会公会議の歴史第18巻 1章 332, 333 節、2章 345 - 352 節に記録されている。（T. and T. Clerk 編集、1896）第5巻 260 - 304 頁 および 342 - 372 頁。

J. Mendham は第2ニケア会議第7総公会議の序論頁 iii - v において次のように述べている。“像の礼拝…は教会に人目を盗んで、ほとんど気づかれずに忍びこんできた、キリスト教の腐敗の一つである。この腐敗は、ちょうど他の異端のように、それ自身が一夜に出現したのではない。そうだったら、これは決然とした非難と譴責に出会ったことであろう。

「像は最初、礼拝されるためではなしに教会に導入された。読むことの出来ない人々への教えのために本の代用として、または他の人々の心を献身を鼓舞するために。…しかし、教会に持ちこまれた像は、無知なる者の心を明るくするどころか、かえって暗くし、礼拝者の献身を高めなくて、むしろ墮落させたことが判った。」

## 付録 8

## 神の律法の変更

十戒はローマ・カトリック訳の聖書に存在するにもかかわらず、忠実な信者たちは聖書からではなく、教会の教理問答書で教育された。しかし、これら（教理問答書）に現れているように、神の律法は変更されてしまっており、事実上、法王によって再布告されたのである。

「偶像の製作、崇拜を禁じる第2の戒めは、カトリック教理問答書において省かれ、貪欲を禁じる第10の戒めが2つに分割されている。」 Bible Readings for the Home (ワシントン：レビュー・アンド・ヘラルド出版協会、1942) 221 頁

次頁に、神ご自身がお与えになったおきてと、人が変更したおきてを示した。

## 付録 9

### 最初の日曜休業令

「法的な義務としての日曜礼拝のもっとも早期の認知は、紀元321年のコンスタンティンの政令である。農事に携わる者には好意的に例外とし、すべての裁判所、町の住民、作業場は日曜に休業（*venerabili die Solis*）することを立法化した。」ブリタニカ百科事典、第9版「日曜」の項。

ラテン語による原語では、*Codes Justiniani*（ジャスティニアンの法典）第3巻12部、法令3

これはラテン語で与えられ、英語では Philip Schaff 著キリスト教会の歴史（第3版）の第3巻7章75節380頁の脚注を参照。

および、Albert Henry Newman 著、教会史マニュアル、（フィラデルフィア：The American Baptist Publication Society 1933）改訂版第1巻305－307頁

および、Lerou E. Froom 著、わが父祖たちの預言的信仰（ワシントン：レビュー・アンド・ヘラルド出版協会、1950）第1巻376－381頁を参照。

## 付録 10

## 「第1日」に関する聖句

毎週、何百万という真面目なクリスチャンたちが、週の第1日である日曜に、教会に出席している。彼らは、とにかく、何処かで、誰かが礼拝の日を変更したと信じて、そうしている。でないとしたら、彼らは次のことに気づいていない。すなわち、神は週の第1日でなく、第7日を彼の聖日として取り分けられたのである。

それは本当であって、変更がなされたのである。

しかし、誰がそれをしたのだろうか？ 神は安息日を地球の歴史の第1週目にお定めになったことを、私たちは知った。神はそれを神と人との間の週ごとのアポイントメントとして、脇に取り分けられた。祝福、元気回復、いわば2人の愛人どうし(神と人)のデートの日として。

もし、私との特別の予約日について神が気を変えられたら、彼はそんなに大事な変更を聖書に記録されなかっただろうか？

獣の権力はその変更を行ったと主張していることを、私たちはすでに知っている。しかし、聖書はそのことについて、何か言っているだろうか？



新約聖書に 8 つの聖句が、週の第 1 日について述べている。  
では、それらをよく調べて見よう。

マタイ 28 : 1

マルコ 16 : 1, 2

マルコ 16 : 9

ルカ 24 : 1

ヨハネ 20 : 1

ヨハネ 20 : 19

使徒行伝 20 : 7, 8

第 1 コリント 16 : 1, 2

最初の 5 つの聖句は、単にその婦人が復活の朝早く墓に来た、  
そしてイエスが死からよみがえられたことだけを語っている。

では、聖書を開いてヨハネ 20 : 19 を見て頂きたい。それは、  
復活の日の夕方イエスが弟子たちに現れられたことを伝えている。  
そこに集まっていた理由は “弟子たちはユダヤ人をおそれ  
て” だと述べている。

彼らは、おびえていた。いつユダヤ人たちが彼らを引っ捕ら  
えに来て彼らの先生と同じ運命に合わせられるかと。彼らは隠  
れていたのである。

彼らは、彼らの愛する主が金曜日に死なれたのを見ていた。  
「そして帰って、香料と香油とを用意した。それからおきてに従っ

て安息日を休んだ。」(ルカ 23：56)。そして、今、ドアを閉ざして彼らは隠れた。「ユダヤ人をおそれて」(ヨハネ 20：19)。

変更についての記述はない。

第7番目の聖句は使徒行伝 20：7, 8 で「週の初めの日に、わたしたちがパンをさくために集まった時、パウロは翌日出発することになっていたので、しきりに人々と語り合い、夜中まで語りつづけた。わたしたちが集まっていた屋上の間には、あかりがたくさんともしてあった。」と記されている。

これは、週の第1の日の暗い部分、夜の集会であった。聖書の計算では1日の暗い部分は、明るい部分の前に来る。(創世記 1：5を参照)。「神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕となり、また朝となった。(英訳：夕と朝が第1日であった) 第一日である。」暗い部分が最初に来る。

聖書は1日を日没から日没までとする。

第7日は金曜日の日没に始まる。週の第1日は土曜日の夕、日没時に始まる。

パウロは、土曜日の晩、週の第1日の暗い部分で、彼の友人たちと集まっていた。これは送別の集まりであった。彼は夜中まで説教し、ユテコはかわいそうに窓から落ちてしまった。(使徒行伝 20：9)

神が彼のいのちを助けられたことを知って、彼らはどんなに

慰められたか、想像してみよう。11 節は言う。彼らは夜明けまで語って、それからパウロは出発したと。13 節は、パウロが日曜の朝をアソスへの旅に過ごしたことを述べている。

安息日の変更に関し、何も言っていない。

ニュー・イングリッシュ・バイブルは、この聖句を次のように訳している。

「土曜日の晩に、パンをさくための集まりで、翌日出発することになっていたパウロが、彼らに語り、それが真夜中まで続いた。」使徒行伝 20：7

週の第 1 日について語る最後の聖句は、第 1 コリント 16：1、2 である。

つまり「聖徒たちへの献金については、わたしはガラテヤの諸教会に命じておいたが、あなたがたもそのとおりにしなさい。一週の初めの日ごとに、あなたがたはそれぞれ、いくらでも収入に応じて手もとにたくわえておき、わたしが着いたときになって初めて集めることのないようにしなさい。」と言い、3、4 節でエルサレムへの献金は、彼が運ぶだろうと言っている。

エルサレムの貧しい聖徒に持ってゆくため、彼が来たとき、ガラテヤでしたように、コリントの人たちも寄付金をすべて準備しておくようにパウロは求めた。聖句には教会の礼拝について何も言っていない。ただ、週の第 1 日に各人は“手もとにたくわえ”るようにとは、人びとにとって、いくらかを取り分

けるに最善の時だったからである。週の終わりのほうでは、それを使ってしまいうだろうから。それは現代でも同じことである。パウロは“わたしが着いたときになって初めて集めることのないように”（第1コリント16：2）それを求めたのであった。

このとき、クリスチャンたちはエルサレムで困難に耐えており、パウロは各教会を回って、彼らのために寄付を集めていた。（わたしたちも現在そのように思いやり深くあるべきである）

神の安息日を日曜に変えたことにつき、この聖句に何も言っていない。

礼拝に関して、パウロのしきたりはどうだったろう？

ここに、それがある。

「パウロは例によって、その会堂には行って行って、三つの安息日にわたり、聖書に基づいて彼らと論じ。」（使徒行伝17：2）。

われらの模範として、イエスも教会に土曜日、第7日に出席する習慣を持っておられた。（ルカ4：16 参照）

## 付録 11

### 礼典律と2つの契約

神の道德律（十戒）と礼典律との間の区別は明らかである。

注意深く、この2つの違いを見て頂きたい。動物の犠牲を伴うほうは、十字架に釘づけとなった。他方は、永遠に立つのである。

2つの大いなる戒めは「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。」第2の大いなる戒めは「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。」である。神の十戒は、これらの2つに懸かっている。第1の板に書かれている最初の4つは、神を私たちの全心をもってどのように愛するか（他に神を持ってはならない、偶像を拝むな、神の名をみだりに用いるな、彼の安息日を覚え、それを聖とせよ）。第2の板に書かれている終わりの6つは、自分のように隣り人に愛をもって接するか（両親を尊べ、殺すな、姦淫するな、盗むな、嘘をつくな、むさぼるな）。

### 古い契約と新しい契約

古い契約は、動物の血で批准された（出エジプト 24：5 - 8 およびヘブル 9：19, 20）。そして、神の戒めを守るという民の

約束を基としていた。

新しい契約は、神の律法を私たちの心に書くという、彼の約束を基としていた。そして、それはキリストの血をもって批准された。(ヘブル 8：10 およびエレミヤ 31：33, 34)

ヘブル 8：10「わたしが、それらの日の後、イスラエルの家と立てようとする契約はこれである、と主が言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、彼らの心に書きつけよう。こうして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう。」

## 付録 12

### (時は失われていない)

地球は365日、5時間、46分、47.8秒かかって、太陽を1周する。

しかし、カレンダーにそれを書き込んで絶えず現行としておくことはできない。そのために“閏年”がある。1年は365日より少々長いことを人は1582年に発見し、月を季節に合わせるために天文学者は10日を加えた。しかし、週日の繰り返しに変更はなされなかった。4日の木曜日の次は、15日の金曜日となった。カレンダーは、とにかく曜日を変えないで上記の調整が行われたのである。

もちろん、閏年が設けられて以来何世紀を経ても、曜日の繰り返しはぜんぜん変更されていない。そして、1分の時間も数え落とされてはいないのである。

いろいろな古代の暦が使われていた。私たちが今使っている最初の現代的な暦は、ジュリアス・シーザーにより紀元前45年に使われ出した。私たちが今使っている日の名前も、そのまま使われている。

バビロン人らは惑星を拜んでいたので、曜日を惑星の名で呼

ぶことも、非常に昔から始まった。ヘブル人も聖書記者も、これは絶対しなかった。私たちがいま使っている曜日、つまり日曜、月曜、などはキリストの時代にも存在したが、聖書記者は決して曜日をこうした呼び名で書かなかった理由がこれである。この起源は異教にあったからである。バビロンとペルシャ時代からの古代ミトラの宗教は、曜日の呼び名を惑星から取るように導いた。ゾロアスターは、ミトラ神をペルシャで紀元前630年ごろに普及させた。

ミトラは大いなる勇気の神とされていたので、ローマの軍人たちはその崇拜者となった。彼らの旅によって、曜日の呼び方を惑星からとる彼らの考えは、いまドイツ人として知られるチュートン族の中に運ばれた。チュートン人は、曜日の惑星の名のいくつかを彼らの神々の名で代用した。(これはキリストの時代以前である)。これらの名称は固定し、それ以来使われている。下はチュートン人の神々のリストで、また我々の曜日の名である。

太陽 (Sun) 一日曜 (Sunday)

月 (Moon) 一月曜 (Monday)

ティウ (Tiu) 一火曜 (Tuesday)

ヴォーデン (Woden) 一水曜 (Wednesday)

トール (Thor) 一木曜 (Thursday)

フリック (Frigg) 一金曜 (Friday)

セターン (Seturn) 一土曜 (Saturday)



365日5時間48分47.8秒の1年を、暦は常に補正しているけれども、7日の週は決して変えられたことはなかった。

キリスト時代、そして、それ以前も歴史は「太陽の日」および「サウルヌスの日」を引き合いにして、書かれている。

カリフォルニアのハミルトン山にあるリック天文台の館長、W. W. キャンベル博士は、こう確証する。「7日1週は、モーセの時代からずっと用いられて来た。そのときから現在まで、週と曜日の繰り返しに何らかの不規則な変化があったと考える理由はない。」 D. W. Cross あなたの驚くべきカレンダー (Taunton 1972) 6, 7頁

星の位置によって、時は秒単位にまで追跡することができる。私は首都ワシントンの国防省天文部に、問い合わせをしたところ、丁寧な返事を受け取った。彼らは、星の位置から紀元前500年以前から、秒単位をもって時は確認されていることを教えてくれた。

英国天文・暦学学会の首席年代学者 J. B. ディンブルビー博士は、何年にもわたる周到な計算の結果から主張する。「もし、人びとが週の曜日の見張りを止め、そして時の道筋を忘れても、惑星の子午線通過、または太陽と月の食の発生時の観測によって、週の曜日は見つけ出せる。これらの偉大なる天の哨兵たちは7日を科学的正確さをもって守っていて、雷鳴のように7日7日を靈感のページの上に刻み込んでいる。」 過去のすべての時間、10頁

著名な天文学者 G. E. ヘイル博士（名高いパロマー山の天文台は

彼の名をとってヘイル天文台と呼ばれる) は、同じ真理を、どのように力強い5語で言い表したかを知ることが興味深い。「時は失われてはいない」(No time has been lost)

私たちは、全人類に臨む迫り来る大事件に備えるために、この本を多くの方々に配布したいと望んでいます。増刷のために献金して頂ければ幸いです。

サンライズ・ミニストリー

〒 905-0428

沖縄県国頭郡今帰仁村今泊 1471

TEL 0980-56-2783

FAX 0980-56-2881

郵便振込番号：02080-0-12121

名称：サンライズミニストリー

※ ATM からの場合 80 円 (3 万円未満)、窓口からの場合 120 円 (3 万円未満)

ゆうちょ口座間振込 .....

通帳記号：17050

番号：3449441

名称：金城重博 <<手数料無料>>

銀行振込 .....

銀行名：琉球銀行 支店名：今帰仁出張所 店番：403

口座：普通

口座番号：158738

名義人：金城重博

海外からの

送金方法 .....

① International Postal Money Order での送金。

宛名：Shigehiro Kinjo

② Paypal での送金。<<手数料無料>>

送金先メールアドレス：kinjos@live.jp